



Humanity & Nature Newsletter

No.31
June 2011

地球研ニュース

創立10周年
記念号



タバコはトルコの貴重な輸出作物で、日本も輸入している。アナトリア高原東部では限られた農地で丁寧に栽培されていて、一部は近年灌漑されるようになった。トルコ、アドゥヤマン州で
(2010年7月6日撮影：渡邊紹裕)

今号の 内容

P2

巻頭言
地球研10周年の節目に
立本成文

P3

記念特集1●日文研×地球研 所長対談
めざすのはヘテラーキーなコミュニティス
—所員の声が、これからの地球研をつくりだす
猪木武徳×立本成文

P6

記念特集2●シンポジウムの検証
地球研創立10周年記念シンポジウム
「地球環境研究の統合と挑戦
—国際共同研究と未来設計イニシアティブ」

研究所としての国際戦略

谷口真人×久米 崇×鞍田 崇×
半藤逸樹×アイスン・ウヤル

P14

■ 前略 地球研殿—関係者からの応援メッセージ
現在の地球環境問題研究の難しさ
福高義宏
目指していたものに向かって
自信を持って進んでください
中尾正義

21世紀の新しい環境観

—持続性は直線で示せるか？ 答えはYES
和田英太郎

P8

特集3●プロジェクトリーダーに迫る！
窪田順平×森 若葉

P10

特集4●プロジェクトリーダーに迫る！
梅津千恵子×石山 俊

P12

■ 百聞一見—フィールドからの体験レポート
西本 太

P13

■ 出版しました
藤原潤子『呪われたナターシャ』
福士由紀『近代上海と公衆衛生』

P17

■ 所員紹介—私の考える地球環境問題と未来
中村 大

P18

特集5●所内共同研究会のあり方について (2)
谷口真人×窪田順平×檜山哲哉×
松永光平×アイスン・ウヤル

P20

■ お知らせ

地球研10周年の節目に

立本成文 (総合地球環境学研究所 所長)

東北関東大震災(東北地方太平洋沖地震)は未曾有ともいえる被害を残していきました。被害に遭われた方がたには心よりのお見舞いを申し上げるとともに、これから復興が順調に進むことを祈りつつ、地球研もできるだけのことをしていきたいと思っています。

地球研は2001年4月1日京都で産声を上げました。4月には創立10周年記念シンポジウムを催し、『総合地球環境学の構築に向けて—地球研10周年誌』を刊行しました。引き続きこの1年を地球研10周年記念事業年として諸行事を催していきます。

「地球環境問題の根源は人間の文化にある」という哲学にもとづいて、未来世代への責任を問う「未来可能性」を標榜してきた地球研が、これからの10年の舵取りをどうするか、じっくりと考え直す年となれば幸いです。

2011年仲春

創立10周年記念事業年おもなシンポジウム・セミナー

開催日時	事業名称
4月20日	創立10周年記念シンポジウム 「地球環境研究の統合と挑戦—国際共同研究と未来設計イニシアティブ」(会場:国立京都国際会館)
5月21日	日文研・地球研合同シンポジウム 「環境問題はなぜ大事か—文化から見た環境と環境から見た文化」(会場:日文研ホール)
6月12日	第9回地球研地域連携セミナー 「ユーラシアへのまなざし:ソ連崩壊20年後の環境問題」(会場:北海道大学学術交流会館)
8月5日	2011年度地球研オープンハウス (会場:地球研講演室ほか)
9月14日-16日	持続可能な社会のための 科学と技術に関する国際会議2011 「グローバルな持続性の構築に向けて—アジアからの視点」(会場:国立京都国際会館) 主催:日本学術会議
9月29日-30日	第1回同位体環境学シンポジウム (会場:地球研講演室)
10月7日	人間文化研究機構 第17回公開講演会・シンポジウム 「遠い森林、近い森:関係性を問う(仮)」 (会場:国立京都国際会館)
10月26日-28日	第6回地球研国際シンポジウム Beyond Collapse: Transformation of human-environmental relationships, past, present and future (会場:地球研講演室)
2012年1月中旬	第5回 Belmont Forum (会場:地球研講演室)

上記の他に、研究プロジェクトごとのシンポジウムの企画があります。詳細は本ニュースレターでもお伝えします。

地球研10年のあゆみ



めざすのはヘテラーキーなコミュニティ —所員の声が、これからの地球研をつくりだす

話し手●猪木武徳(国際日本文化研究センター所長)×立本成文(地球研所長)+聞き手・編集●阿部健一(地球研教授)

創立10周年の節目を迎えた地球研。これまでの成果を点検し、新たな挑戦に向けた指針を確認する格好の機会だ。国際日本文化研究センター(日文研)は地球研と同じ大学共同利用機関法人・人間文化研究機構に属し、ともに京都から研究の成果を世界に発信する。関心の所在は近く、協同しうるテーマも多い。あるべき研究所とは、求められるリーダー像とは、二つの研究所の所長が縦横に語りあう。

立本●日文研と地球研はいま、年に1回合同シンポジウム*1を開催しています。「京都地球環境の殿堂」*2の京都環境文化学術研究フォーラムにも、2010年度から日文研にお入りいただきました。同じ人間文化研究機構の一員としてともに連携する体制が整いつつありますね。

猪木●われわれも、やる気はありますよ。
立本●そういうなかで今日は、研究機関におけるインパーシャル・スペクテーター(公平な観察者)としてのリーダーシップ、それに所員のセンス・オブ・コミュニティについて話題にしませんか。リーダーシップは直接われわれにもふりかかってくる問題ですので、まずセンス・オブ・コミュニティから始めましょうか。

任期つき研究所の センス・オブ・コミュニティ

猪木●日文研の所長になって、自由な研究の気風はいいのですが、センス・オブ・コミュニティの弱さを感じました。推測だけ地球研でもそうでしょう。大学や一般企業のような教育機能があればセンス・オブ・コミュニティも出てきますが、地球研にも日文研にも共通してこれがない。
立本●違うところもあれば、同じ問題も抱えているのではないかな。日文研と地球研と大きな違いは歴史。地球研は10年ですが、日文研は……。

猪木●来年25年です。

立本●かつて研究所は、人並み優れた人がそれぞれ屹立していればよかったです。

も、20世紀の終わりくらいから、「それではいけない、しっかりした研究機関としての理念が必要だ」となった。

そうしてできた地球研は今年10年目。設立の理念はまだ生きていて、われわれには地球環境学の構築という大きな目的がある。だから、ある程度のセンス・オブ・コミュニティはあるといえるかもしれません。その一方で、プロジェクト制度や任期制などの制度設計が内からのコミュニティ形成の障害となっています。

猪木●プロジェクト制度は選定から終わりまで6年間ですね。6年たてばここを離れるような人が、所のためになることを本格的に考えますか。

立本●考えるしくみが必要です。

阿部●若い研究員はふたたび戻ってくる場として地球研を考えていますね、かなり長期的な視野で。

猪木●一度どこか別の大学に行って……。

阿部●力を蓄えて、今度はプロジェクトを立ち上げるために戻ってくる。そういう場としての地球研であつたらいいなと。

猪木●そういう可能性を考える人はかなり多くいますか。

立本●戻ってきた人は寥々たるものです。戻れるようなしくみと競争原理(公平性の担保)との兼ねあいが問題になります。

阿部●自分の専門を大学でもっと磨きたいと考える人は戻らない。

猪木●それでも母校や銘柄大学から呼ばれたら、研究員は出て行くでしょう。

立本●出て行きます。いっぽうで、「私は地球研に残り、6年をまっとうします」という人もいる。あるいは、次の椅子を提示しても、「いえ、100分の1のチャンスでも地球研に賭けます」、そんな人が出てきています。

バラバラでいっしょの研究所

猪木●プロジェクトは公募されていますが、リーダーは地球研の所属ですか。

立本●プロジェクトリーダーは必ず地球

研の専任職員にならねばなりません。地球研という場でみんなと地球研の空気を吸って、地球研のセンス・オブ・コミュニティをきちんと体得する、これが重要です。しかし、社会学者がいう意味でのコミュニティ感情なんて、学者は持ちっこない。

猪木●なるほど。しかしセンス・オブ・コミュニティには、研究に関するものと自分が属している組織へのものとの二つがある。

立本●たしかに、センス・オブ・コミュニティのコミュニティには枠組みと内容の二面があります。研究に関するものは内容で、これは細かいスタンスについてとやかくいうべきではないと思います。内容が違っても枠組みとしては同じです。だから、「バラバラでいっしょ」。内容はバラバラでよろしい。ただ、同じ場所にいることが「いっしょ」。

猪木●自分の好きなことだけをやる人が集まっても、組織は存続しない。

立本●だから、コアになる人が30%は残る制度にしました。

猪木●30%の人がコミュニティとしての存続に必要な時間とエネルギーを負担するわけですね。あとの70%は……。

立本●バラバラでいっしょ。出ていったり、戻ったり。キャリアステップの一つとしてどうぞご利用ください。私は、任期付きの研究者には、「8割は自分のための研究を、2割は研究所のためにしなさい」といつている。30%の研究者は研究推進戦略センターに属しているのですが、その人たちには、「8割は研究所に尽くせ、2割は自分の研究にどうぞ」。そういう区別をしています。

地球研は任期制で、任期後の約束はない。それでも人が集まるのは研究がしたいからです。財政的な裏づけがあって教育や雑務なしで研究に集中できるのは大きな魅力で、優秀なやる気のある人が集っている。そういう人を戦略センターがしっかりサポートする。そのかわり戦

*1 2008年度に始まった合同シンポジウムは今年で4回目、5月21日に『環境問題はなぜ大事か—文化から見た環境と環境から見た文化』が開催された

*2 第2回京都地球環境の殿堂 主催:京都環境文化学術フォーラム(京都府、京都市、京都大学、京都府立大学、総合地球環境学研究所、国際日本文化研究センター) 2011年2月12-13日開催

めざすのはヘテラーキーなコミュニティ

略センターの教授には任期をつけない。

猪木●そんなかたちで人が動くのであれば、組織としては健全ですね。

リーダーは公正な観察者である

立本●研究に優れている人と、公正な判断力をそなえている人とは、必ずしも一致しないのは悲劇だといわれています。ある分野にかぎって優れた人がリーダーシップをとる、これがいちばん不幸であるということですか。

猪木●それはちょっと誤解があるんじゃないかな。「私は優れた研究者だから、組織運営には向いていません」というのは、逃げ口上。例外はありますが、大学で理系の学部長などをみても、優れた研究者はやっぱりリーダーとしても優れている。

立本●そういう優秀な、あこがれの研究者もいます。しかし、たとえば、俯瞰的な判断力のない二流のトップランナーがリーダーシップをとるのはどうですかね。

猪木●逆に、「研究に向いているから行政をやりたいくない」という人もいますが、こういう人は研究も行政もだめです。

立本●それが二流のトップランナー。

猪木●へんな人がリーダーになったら困るから、ルールをつくる。

立本●ルールを決めてリーダーを選ぶ。そのとき必要なのはやはり「公平な観察者」の見方ができる人。俯瞰的な判断ができるかどうかです。

猪木●公正な判断ができる人間かどうか、評価者を評価するのがいちばん難しい。

ボトム・アップを醸成する

立本●リーダーシップというのは号令をかけるだけではない。ボトム・アップで、みんなを動かすのがリーダーシップ。働いてくれないければリーダーは失敗です。いまの若い人は、「所長、こういうことをトップからいってください」と口にする。研究所なんて、トップがいったからと

いってみんなが聞くようなコミュニティではない。みんなバラバラ。でも、それを動かすのがリーダーシップです。

猪木●別の言い方をすると、リードされる能力、センスもやはり必要。リーダーがいくら叫んでも、聞く側にそういうセンスがなければ確に動かない。

立本●もちろんそうですが、それを醸成するのもリーダーの役目。フォロワーがいないと、だめだから。

阿部●リーダーというのは、育てようとして育てあげられるものでしょうか。

猪木●リーダーというのは、平べったくいうと、「この人が言っているのだから、まあ従いましょう」ということかな。

立本●まったく賛成します。

ヘテラーキーなコミュニティ

阿部●どう従わせるかもいろいろあります。カリスマ的な人もいるし、ロジックで詰める人もいる。この人は頼りないからみんなで支えなければというのもある。

立本●リーダーシップで人を動かす対局に、カリスマ性と官僚制があります。所長が指示すればついてくると言う人は、官職カリスマですべてを考えていて、これは間違いだ。コミュニティがヒエラーキーではだめで、ヘテラーキーでないといけない。真ん中よりも下にいる人間も上を動かす。これがヘテラーキーなリーダーシップです。ところがみんな間違っただけでヒエラーキーな階層性で考えたがる。

猪木●上意下達みたいだね。

立本●そう。研究者コミュニティはふつうの意味でのコミュニティではありません。60年代のおわりに流行った反構造的なコミュニティ、つまりコミュニティでなければいけない。もちろんバラバラではいけないから、センス・オブ・コミュニティは必要ですが。

猪木●それには私も基本的に賛成です。それでも1割ほどは官僚的な部分も……。

立本●もちろんです。こんなこといって

いる私も、ついつい官僚的になる(笑)。

地球研が 大学院をそなえれば……

猪木●私は、いくつかの意味で高等研究機関は大学院をそなえているべきだと思います。一つは教育によって次世代をつくる必要性。地球研の固有の研究スタイルとテーマを意識させ、ドクター論文を書く段階から育てる。もう一つは研究者だけだと空気がよくない(笑)。若い人に接して刺激をうける必要がある。

阿部●地球研に大学院生はいませんが、30代が40%、40代が40%、50代が8%で、60以上は6%です。

立本●たくさんいる若手研究員は、大学院生のような存在でもあります……。

猪木●平均年齢が若いのはとてもいい。

阿部●地球環境学の教育というのは個々の専門性の教育なのか、それとも……。教育機能をそなえたとき、そのディシプリンはどうなるのでしょうか。

猪木●それは私が聞きたいな。『地球環境学事典』^{*3}をいただきましたが、とてもおもしろかった。テーマ、切り方、メソッドなど、きわめて多分野横断・縦断の研究書だというのが第一の印象です。かりに地球研が大学院のプログラムをそなえた場合、さまざまな分野の修士を終えた大学院生がドクター論文を書きたいといってくる。病院で何科にかかればよいかを指示するように、「こういう関連分野があるから、こういうメソッドでトライしたらどうか」と指導できる人がいれば、こうした分野が独立したフィールドとしてもっと自己主張できると思う。

阿部●『地球環境学事典』は、そういう手持ちのカードを見せた段階です。

立本●第I期、最初の10年ではできなかったことを第II期でしようとしています。その一つがトランスディシプリンの導入です。トランスディシプリンは横ではなく縦の、垂直な連携です。transにはcrossと

*3 総合地球環境学研究所編『地球環境学事典』弘文堂 2010年10月刊行

たちもと・なりふみ
 専門は人間学(人類学、社会学、地域研究、環境学)。二〇〇七年から現職。

あべ・けんいち
 専門は環境人類学、相関地域研究。研究推進戦略センター成果公開・広報部門長。二〇〇八年から現職。



いのき・たけのり
 専門は労働経済学、経済思想。日本経済論。二〇〇八年から現職。



同時に above の意味もありますから。
 阿部●いろいろなディシプリンを超越するわけですね。

立本●オントロジーでいえば、価値からなにから、物質の世界までトランスする。これが一つ。もう一つにはディシプリンをトランスするというのもある。だから、ディシプリンをトランスすればなにになるかが常に問われています。地域研究もそうですが。

猪木●日文研にもその問題はあります。

トランスディシプリンこそが存在理由

立本●トランスディシプリン、新しいディシプリンにならざるをえない。地球研がもし教育をやるなら、修士の最初にトランスディシプリナリーなことをやらせて、その次にもう一度分化して、最後に論文としてトランスディシプリンする。

猪木●ディシプリンをトランスしてなにか新しいディシプリンが生み出される可能性は百に一つとか、千に一つでしょうね。
 立本●そうです。それが証明されるのは私が生きている時代ではない(笑)。しかし、そういう挑戦が学問だと思う。

猪木●それに賭けるというのは、それはそれで難しいね。私たちの時代だと、同じ理学部でも生物学と物理学は別の分野と思えたが、いま違う。ある範囲内での隣接分野との融合で、新しいものがどんどんできています。

立本●私はそれを複合領域といっています。ディシプリン間の複合はたくさんある。トランスディシプリンはそれを超えた統合的なもの。

猪木●具体的に大学院後期課程の募集要項を書くとして、対象者は、修士までになにをしてきて、今後なにをすべきか、そのイメージはどのようなものですか。

立本●さっき話したように、そのイメージを所長だけがもっていて、みんながついてこなかったらだめなわけです。それを

待っているんです。やはり2、3年をはかるでしょうね。焦ってできあいのカリキュラムでやってもしょうがない。自分のところのカリキュラムでないと。

阿部●地球環境学のカリキュラムを考えるのは楽しい作業だと思う。

猪木●重要なのは、立本さんがおっしゃったトランスディシプリンの「トランス」。創成していく途上にあるという、knowledge in the making かな。

立本●そうですね。教育とはもともと establish したものを伝えるという意味でした。でも、いまの教育はそれではすまないでしょう。だから、トランスディシプリンと言いつつ、knowledge が establish したというのは幻想にすぎず、いつでも in the making。それを伝えるのに元のディシプリンでは不十分で、トランスディシプリンでなければならない。これがわれわれの存在理由。

猪木●似ているね、われわれの発想は。

立本●よかった。

共同テーマは環境と「都市」「倫理」

猪木●本格的に考えたらおもしろいと思いますよ。つまり、環境とはある人間あるいは人間の集団を取り巻く世界ですね。それに対して日本人が、中国人が、途上国の人が、あるいはヨーロッパのきわめて成熟した社会がどのように反応しているかを比較研究する。なにを優先させるか、文化といわないまでも価値序列の違いが明らかになる。

単純な例として、産業化による環境破壊。もつときめの細かい、価値に対する比較研究もあります。衣服でもそうですよね。美だとか、価値に対する反応のしかたが文化によって違う。

価値の分析はとても大きな問題で、それが人間研究の根底にあると私は思っています。それを環境の問題と人間の問題として捉えれば、とても肥沃な分野が広

がります。地球研が大学院生の募集をされるなら、私ならばそういうテーマで採ってくださいと手を挙げる(笑)。

立本●価値命題は、トランスディシプリンの垂直軸の最上位に置いています。所員にも、みなさん価値命題を出してくださいとはいっている。

猪木●それを可視的あるいは触知できる世界として具体的に議論するには、やはり文化、環境です。それを将来的な地球研のプロジェクトとしていただきたい。

阿部●地球研は第Ⅱ期の方向性として設計科学を出しています。これまでの認識科学は事実命題だけだったが、価値命題も採らなければいけないということです。

猪木●都市の問題もやってくださいよ。文化的な問題からすると、都市は変える力をそなえた「倫理のイノベーター」なんです。変えていく力を持った。文化が都市の環境とどう結びつか、日文研と地球研で手を組めますよね。

阿部●「倫理のイノベーター」という言葉は、ぜひ使わせていただきましょう。

猪木●都市は、地球研と日文研の共同テーマとしておもしろい。「都市文化と環境」とかね。すこし一般的すぎるなら、倫理の問題とか行動規範とか。

立本●地球研と日文研がいつしよにやるのは、そういうところですよ。

猪木●日文研では月に一度、所長主催のランチオンや立食会をやっています。所員や外国人研究者を招いて。

立本●外国人研究者との懇談はやりたいたいけれども、なかなかできない。

猪木●センス・オブ・コミュニティではないが、月に2、3回は分野の異なる人たちが無駄話ぐらいいはと。

立本●そういうものは必要です。私はコミュニティのセンスとよんできましたが、うちにはまだ猪木さんのいうコミュニティのセンスがある。期待しててください。

2011年3月1日 四条烏丸にて

シンポジウムの検証

地球研創立10周年記念シンポジウム「地球環境研究の統合と挑戦——国際共同研究と未来設計イニシアティブ」

研究所としての国際戦略

話し手●**谷口真人**(地球研教授)×**久米 崇**(地球研特任准教授)×**鞍田 崇**(地球研特任准教授)×
半藤逸樹(地球研特任准教授)×**アイスン・ウヤル**(地球研助教)

編集●久米 崇

地球研は第Ⅱ期に入り、未来の社会に向けた設計科学の形成を目標に掲げた。いま、求められる国際連携はどのようなものか。地球研の設立10周年を記念したシンポジウムのテーマとなったのが、この問題であった。コーディネーターを務めた谷口教授と司会を担当したウヤル助教、それに未来設計イニシアティブの中核にかかわる三人の研究推進戦略センター基幹研究ハブ特任准教授が、シンポジウムでの発表とディスカッションをふまえ、これからの地球研のあるべき姿を議論した。

ウヤル●谷口さん、シンポジウムの企画はどこから着想されたのでしょうか。

設立10年の反省から

谷口●地球研の設立から10年、個々のプロジェクトはおおむねよい評価を得ています。ただ、地球研全体としての成果がなかなか見えないと言われる。また、これまでの国際連携は研究者個人レベルでのつながりでしかなかった。この二つの反省が出発点です。地球環境研究の国際的な枠組みをいちど整理し、今後の連携のあり方を探る必要がある。その第一弾として企画しました。今後、第四弾まで考えています。

明らかになったこと、これから議論すべきこと

ウヤル●特任准教授の三方は、どのようにご覧になりましたか。

半藤●全体的に大枠での話題が多かったように思います。たしかに時間的制約はありましたが、もうすこし踏み込んで、

●講演

「地球環境変化研究における世界気候研究計画(WCRP)と地球圏生物圏国際協同研究計画(IGBP)の役割」 安成哲三(名古屋大学教授)
「グランドチャレンジのための地球研と日本 IHDPの建設的協働に向けて」 氷見山幸夫(北海道教育大学教授)
「生物多様性に関する国際共同研究とその枠組み」 中静 透(東北大学教授)
「設計科学を取り入れた未来設計イニシアティブ——第Ⅱ期地球研の共同研究のありかた」 佐藤洋一郎(地球研副所長・教授)

●パネルディスカッション

コーディネーター: 谷口真人(地球研教授) パネリスト: 安成哲三、氷見山幸夫、中静 透、佐藤洋一郎

●開催概要

2011年4月20日(水) 13:00~16:00 (国立京都国際会館) 司会: アイスン・ウヤル(地球研助教)

国際機関との連携の具体的な目標や作業のあり方を議論すべきでしたね。

久米●GEC(グローバル環境変化プログラム=Global Environmental Change)のような国際共同研究プログラムの役割は、シームレスなシステム理解、データ・アーカイブの共有、国際社会への貢献、知識情報交換などです。これは地球研の方向性ともよく合致し、協働が難しくないとよくわかった。さらに進んで、地球研の得意分野と国際研究プログラムをどのように結びつけるかを議論できたらよかったですと思います。

鞍田●基本的な認識は二人と変わりません。第一回目であったためか、総論に終了したと思います。国際連携といっても問われるのは、どの問題をどの地域で扱うのか、具体的な事柄です。

半藤●当日も議論になった、若い研究者が国際連携にどのように関わるかは重要な問題です。

谷口●では、地域と全体の話、国際機関との具体的な連携の仕方、そして若手研究者の関わり方の三点に絞って議論しましょう。

どこで、だれと、どのように

鞍田●国際機関での研究はさまざまな地域で行なわれています。そのどこに参画するかを決めるには、地球研が得意とするのはどの地域かを考えればよいでしょう。たとえばアジア

もしくは広域アジアといったような。

谷口●地球研の強みは地球環境問題を、人間を含めて扱うところです。それを考えると、まず連携の相手となるのはIHDP(地球環境変化と人間社会の動向に関する国際研究計画=International Human Dimension Programme on Global Environmental Change)でしょうか。

ウヤル●IHDPとは、個人だけでなく、プロジェクトベースでの連携はすでに深まりつつあります。地球研の理念やこれまでの経緯を考えると、IHDPが一番近いと思います。

鞍田●たとえばIHDPアジア支部の事務局を地球研が引き受ける。そこから国際連携を積み重ねるのも一つの方法かもしれませんね。

半藤●IHDPに限らず国際機関との連携には、政治ベースと研究成果ベースの二つがあります。IHDPとの研究成果ベースでの連携は容易でしょうか、それが結果として地球研のアピールにつながるかは別問題です。政治ベースなら、国際連携による研究費の獲得という意味が強くなる。研究ベースでも政治ベースでも、連携する意義をしっかりと議論し、地球研のスタンスを明確にすることが不可欠です。

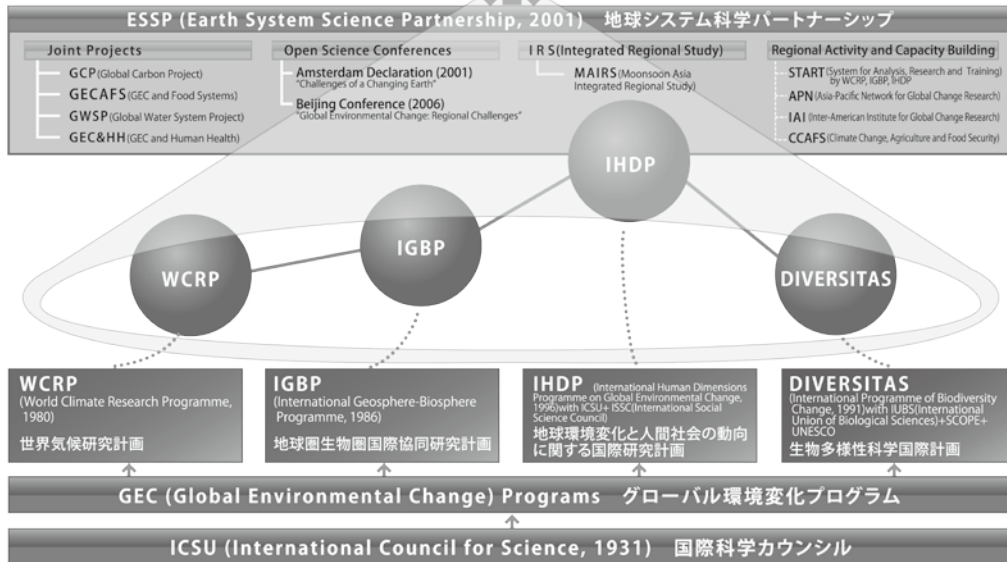
久米●いまは地球研の理念に照らし合わせて連携の方法を模索していく段階だと思います。

谷口●研究ベースなら、プロジェクトの成果を発信する、出口のところで使える、利用できると思います。また、国際機関



*1 2006年11月6-8日、国立京都国際会館にて「水と人間生活」をテーマに開催

*2 「持続可能な社会のための科学と技術に関する国際会議2011——地域からグローバルな持続可能性の構築に向けて:アジアからの視点」 2011年9月14-16日、国立京都国際会館にて開催。地球研は共催として参加



ICSUにおけるグローバル環境変化プログラムと Earth System Visioningの流れ

のネットワークに加われることも大きい。そのつながりを次のプロジェクトを立ち上げる際には、おおいに利用すべきでしょう。

半藤●研究成果を発信するときに、なにを重点課題とするかも大きな焦点です。テーマを狭めて特化しないと、国際機関には入りづらい。
久米●まずは一点突破でしょうね。そのためには第I期のプロジェクトのレビューをし、地球研のセールスポイントを明確にしなければなりませんね。

若手研究者こそ、国際連携の先頭に

ウヤル●若手研究者はどのように国際連携に関われるのでしょうか。

谷口●若い人がプロジェクトの最初期、ストラクチャーを決める段階から加わるべきだと、今回のシンポジウムをはじめ、いろんなところで議論されています。

鞍田●たとえば、若手にセッションをオーガナイズさせて、教授、プロジェクトリーダーがそのフォローをする方法もあるでしょう。

谷口●そうした経験は重要です。国際連携の中で若手同士がface to faceでコミュニケーションをして、ネットワークを広げていかなければ。

鞍田●地球研の第1回国際シンポジウム*1でポスターセッションをしました。多く

の若手研究者が集まって、メインのシンポジウムさながらに盛り上がりました。そうした経験も若手研究者にはとても重要だと思います。プロジェクトレベルでの連携は、もちろんプロジェクトリーダーが中心になって進めます。けれども、別の連携ルートがきちんとあって、若手が自発的に活動できる機会を確保しておくことが必要です。

半藤●地球研の研究者は、プロジェクト発表会などでは教授やプロジェクトリーダーに、また所員会などでは所長にでさえ、対等にものがいえる環境にいます。さらに積極的に発言・発信してもらいたい。

連携の選択肢は数多い

ウヤル●地球研で議論しているのはGEC、IHDP、それらを包括するICSU(国際科学カウンシル=International Council for Science)との関係だけではありません。それ以外の国際連携もありえますね。

谷口●冒頭に四弾と言ったのは、いま拳がったICSUに関わるものを念頭においています。今回が第一弾、次に9月には日本学術会議主催のアジアにおけるサステナビリティの会議*2があります。さらに12月には、ICSUのEarth System Visioningプロセスをふまえ、次の10年の地球環境研究のファンディングを話し合うBelmont Forum会議*3が日本である。そして来年の

*3 アメリカのNSFをはじめ、研究ファンドを扱う機関を中心にした会議。これまで4回開催され、重点課題などを検討している

*4 2012年3月26-29日、ロンドンにて開催

*5 World Water WeekはSIWI (Stockholm International Water Institute)等により運営され、今年は8月21-27日に「都市化する世界における水」をテーマに開催

*6 2012年3月12-17日、マルセイユにて開催

たにぐち・まこと
専門は水文学。研究推進戦略センター戦略策定部門長。二〇一一年から現職。
くめ・たかし
専門は同位体土壌水文学。二〇一〇年から現職。
くらた・たかし
専門は哲学。二〇一〇年から現職。
ほんどう・いつき
専門は地球システム科学、分野横断的数理モデリング。二〇一一年から現職。
あいすん・やう
専門は国際関係論、国際政治経済。二〇一〇年から現職。

3月には Planet Under Pressure という会議*4 がロンドンであります。

ICSUとは関連しないイベントもあります。たとえばドイツの IASS (サステナビリティ上級研究所 = Institute for Advanced Sustainability Studies) やストックホルム世界水週間*5、世界水フォーラム*6です。もちろん水だけでなく、多様性やスローフードなど、いろいろな会議があります。どれにどう関わるのか悩ましい点ですが、動向調査を踏まえて連携の方向を決めたいと思います。

設計科学の理念は国際的にも有効だ

ウヤル●最後に一言ずつ、お願いします。
久米●地球研としてのアイデンティティをみんながもって、なにをしたいのか・すべきかをよく考え、その上で国際機関とうまく付き合えばよいと思います。

鞍田●そのためには、基幹研究ハブや戦略策定部門でしっかり議論し、その結果はもちろん、プロセスを含めて全所員に伝える装置が必要でしょう。

半藤●今後は、設計科学を積極的に表に打ち出していく必要があります。たとえば、地域の人間文化を維持するための新しい環境基準や未来可能性のための生活スタイルを提案しなければならない。所全体が設計科学にシフトしたことを示しましょう。

谷口●設計科学を掲げ国際的に勝負に出ようとしても、未来可能性という言葉が通じなかったり、サステナビリティでなぜだめかと言われたりする。そこで説得できるよう、設計科学の理念を明確に伝えねばならない。そのために、どこをターゲットにして勝負を挑むか、青写真を早く作らねばなりません。

ウヤル●きょうはありがとうございました。

2011年4月22日

地球研「基幹研究ハブミーティングスペース」にて

プロジェクトリーダーに迫る！

歴史が語る未来の環境——人間社会と環境の相互作用を展望する

研究プロジェクト「民族／国家の交錯と生業変化を軸とした環境史の解明——中央ユーラシア半乾燥域の変遷」

話し手●窪田順平(地球研准教授)＋聞き手●森 若葉(地球研プロジェクト上級研究員)

編集●森 若葉

民族／国家の複雑な変遷を経てきた中央ユーラシア——この地域でからみあう人間と環境の相互作用を解きほぐしてきたのが「イリプロジェクト」です。研究の最終年度を迎えたプロジェクトのリーダーである窪田順平准教授に話を聞きました。

森●プロジェクトの対象は、イリ河を中心とする中央ユーラシアの半乾燥地域ですね。歴史的にみても多くの国が興亡していますが、そういう地域で1,000年という長期にわたる環境変化や土地利用を研究されている。ここを研究対象として選ばれた理由は为什么呢。

国境をまたぐ研究のもどかしさ

窪田●もともと半乾燥地の資源利用に興味があって、しかも国境と環境問題との関係についての関心から、国境をまたぐこの地域を対象に選びました。

中央アジアで問題になるのは、中国とロシアの研究のギャップですね。

森●それはどのようなものですか。

窪田●ロシアでの研究は、日本や中国にはあまり知られていません。その逆も同じです。ロシア語と中国語の双方の史料をあつかえる研究者が少ないのです。人もモノも動いているのに、政治的国境のために知的交流が限られ、研究はあまり進んでいませんでした。

森●難しい地域をあえて選ばれたのですね。国境に地理的障壁はないのですか。

窪田●基本的にはありません。イリ河は中国とカザフスタンの国境を交差しますが、半乾燥地域で、谷の面積にくらべて水量が豊かで、農業用として最大限利用しても水利上のトラブルはあまり生じません。

森●イリ河が流れ込むバルハシ湖で湖沼コアを採取・分析なさっていますね。

窪田●バルハシ湖は瀬戸内海くらいの細かい湖です。過剰な農業用水の利用によって消滅の危機にあるアラル海とは事情は異なって、中国の南水北調のような河の

付け替えでもしないかぎり、干上がることの無い湖です。

森●そのような大工事は、もはやロシアもしないのではないのでしょうか。

窪田●ロシアの大河の多くは北極海に注いでいて、このことが北極海の気候に重要な役割を果たしています。ところが、水を資源とだけ考える人からすると、海に流れるのは無駄なことのよう思えます。そこで、アラル海を救うために転流すべきだという主張は一貫してあります。川の高低差も少ないから、工事は南水北調よりは容易です。

過去の開発を検証する

窪田●ロシアの大規模開発は、外交的領土拡張、資源獲得を目的とする探検時代からの流れで、これまで地理学者を含む開発主義者が推進してきました。どのような思想のもとに開発し、それに研究者がどのようにかかわってきたかは一つの研究テーマになっています。多くの文書が残されていて、検証は可能です。

森●ロシア国内で検証が行なわれているのですか。

窪田●アラル海が干上がることを予測しつつ、一部の学者が主導して開発したことはわかっています。ただ、開発当時の関係者がソ連崩壊後も権力を握っていることが多い。彼らは昔の失敗には蓋をしたいから検証しようとはしない。

森●農地にしようと考えていたのですか？ その場合、乾燥化や塩類集積は予測していなかったのでしょうか。

窪田●考えられていたのは農地化です。当時としてはあたりまえだったのでしょ。アラル海だけでなくバルハシ湖も、計画者の推定どおりの水位低下を起こしています。ただ、塩害についてはあまりわかっていなかったし、ダストによる健康被害は想定外でした。

森●水位低下を予測しても、付随して起こる現象はわからなかった……。

窪田●アラル海はそうです。バルハシ湖は、銅精錬工場でなりたっていたバルハシの町が水不足の影響を危惧して開発に反対した陳情書が残っています。

森●情報は市民も共有していたのですか。

窪田●そうです。といっても、市民が反対して開発が中止になることは稀です。そもそも、開発によって起こることをすべて予想することはできない。この状況は現代でもほとんど変わりませんね。重要なのはその折々の人の対応や判断で、その検証が環境研究には欠かせません。

ロシアには意志決定に関する文献が残っており検証は可能です。しかし、歴史研究では、知りたいことがわかるとはかぎらない。連続的かつ均等に史料がないのは、まったくもどかしいものです。

プロジェクトが見たカザフのいま

森●ご専門は水文学ですが、アイスコアや湖底堆積物などから得られるさまざまなプロキシの分析と歴史資料、文化人類学的調査を併せ、プロジェクトとしてとてもきれいにまとめられていますね。

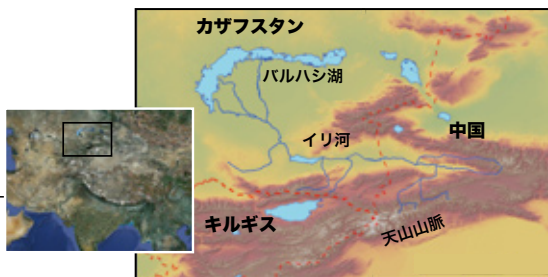
窪田●プロジェクトには、リーダーの専門を中心とするタイプと、そうでないタイプとがあります。私は後者で、ほかの分野にもとても興味があります。

カザフスタンは草原地帯で降水量もまずまずあります。川や泉の周りだけで水が利用できる乾燥地のオアシスの世界とは違う。乾燥地では生業はオアシスに集中するが、草原は面で土地が利用できる世界です。

とはいえ、カザフスタンは、モンゴルのような草原がよく発達した完全な遊牧世



干上がったアラル海の湖底から見つかったケルテリ遺跡。13-15世紀に水位が低下した時代の集落の寺院(モスク)の遺跡。周囲には耕作地の痕跡が残り、礫き白も出土し、農耕が行なわれていたと考えられる。現在周囲は一面分厚く塩が析出した塩害地が広がっている



界とも違う。遊牧と農業とが組み合わせられ、その割合も地域ごとに異なります。地形や降水量など外的環境が生業を決定するので、歴史的にどのような民族がこの地にやってきても基本的に同じ生業になります。

カザフスタンの現在の住民は、その約半分がソ連時代に移住してきた人たちです。ですから、周辺地域と異なり、計画的にソ連のシステムがもちこまれました。インフラや社会システムは揃っていますが、伝統的なものは失われています。森●カザフスタンで伝統的な生業である遊牧は現在、どうなっているのですか。

窪田●移牧ですが分業化され、伝統的なものとは異なります。中央アジアでは、ウズベキスタンが現在も計画経済的な仕組みを残すのに対し、キルギスとカザフスタンは市場経済に移行しました。そのさい、キルギスは伝統的な生業スタイルに戻りましたが、カザフスタンは長く社会主義体制下にあったため、それができなかったのです。

環境は人間社会に影響される

窪田●国家、ガバナンスの違いで生じる現象が変わることがプロジェクトの研究からわかってきました。モノの移動を制限する国境は、環境問題にかかわります。環境問題も社会問題も人間がつくり出すという認識が重要です。

イリ河流域は、上流・下流の違いはあるものの、かつては一連の地域でした。しかし、18世紀後半に国境が定められる



くぼた・じゅんべい
専門は水文学、森林水文学、砂防学。研究プロジェクト「民族／国家の交錯と生業変化を軸とした環境史の解明—中央ユーラシア半乾燥域の変遷—」プロジェクトリーダー。二〇〇二年から現職。



もり・わかほ
専門はシミュレーション学、言語学。研究プロジェクト「環境変化とインダストリアル上級研究員」二〇〇六年から現職。



と、異なるポリシーのもとで、異なる開発が進められ、その結果、文化を含め、別の景観がつくられました。

社会主義の形態も国家によっては異なります。ですから、ソ連型社会主義としてだけではなく、国／地域別にその経緯をみるのはおもしろい。モンゴルから中央アジアにかけての農業と牧業の複合形態、自然の影響、制度が引き起こす問題の違いを、時代・場所別に比較研究することは、たいへん興味深いですね。

森●対象とするタイムスパンの最後の200年ほどのお話を伺いましたが、それ以前の時代はどのようにお考えですか。

遊牧社会の寡黙な歴史

窪田●そこがいちばん問題で、近現代とそれ以前には大きなギャップがあります。農耕社会には時代的な変遷や技術的な画期があっても、遊牧社会には大きな変化はないと思っています。

森●そうですね。私の研究対象は4,000年前のメソポタミアですが、牧畜や小規模な農業のスタイル、道具は、現在のイラクと大きく変わりません。

窪田●そう、遊牧民族がつくった元は世界帝国ですが、国の体制や政治システムは匈奴の時代とほとんど変わらない。この時代の遊牧集団は生業というよりも、軍事的な手段という側面もあります。自然災害には弱いが、それが人口圧調整の役割を果たし、基本的に移動・拡大によって解決します。遊牧社会は、広い領域を少ない人間で使う持続的社會です。これをどのように評価するかによって、対象地域・時代に対する考え方が異なってきます。

文字で書かれた歴史の少ない遊牧社会を追いかけるのは容易ではないですね。12、3世紀はアラル海とバルハシ湖の水位が下がる乾燥期ですが、シルクロード交易が栄えたオアシスの絶頂期

です。その後、寒冷湿潤期にオアシスは衰退しますが、これは貿易ルートのシフトによるものと考えられます。しかし、この間の遊牧社会の状況がほとんどわからないのです。

帝政ロシア以前は、ペルシア語文獻やロシア語の二次資料しかなく、13-16世紀の史料にもとづく環境問題の研究が乏しいのです。といっても興味深い史料もあって、たとえば17世紀のロシア語の史料には、「雪害などの気象災害のために別の地域に移りたい」というロシア皇帝宛の遊牧民の嘆願書が残っています。類似の史料は、清にもありますね。

自然を知り、そして歴史を知る

窪田●プロジェクトの大きな課題は、歴史時代の評価をどうまとめるかです。自然科学的なプロキシの解析成果はそれ自体としてすばらしい。だが、それに携わる研究者が、気候変動と人間とのかかわりに関心が薄いことが多く、過去の自然環境とその当時の人間との接点を見いだすことが難しくも大きな課題です。

森●資料が乏しい時代の歴史研究から明確な結論を求めるのは簡単ではない。

窪田●現代につながるエスニックグループが形成された過程は複雑で、まだ理解できていないところも多くあります。政治的に作りだされたような対立もあります。結論がすぐに出るわけではありませんが、こうしたことをより深く理解することは重要だと考えています。

森●にわか学問と謙遜されますが、ご専門以外の研究領域への深い関心に感銘を受けました。過去の開発の歴史的検証が、未来への有効な提言を可能にするというお話はとても説得的・魅力的です。

地球研では、地域的にもテーマ的にも関連する研究が集積されつつあります。イリプロジェクトの成果は、地球研の内外に引き継がれることでしょう。

2011年2月28日 地球研「プロジェクト研究室」にて

環境変動のショックから、ありうる回復の方途を探る

研究プロジェクト「社会・生態システムの脆弱性とレジリアンス」

話し手●梅津千恵子(地球研准教授)+聞き手●石山 俊(地球研プロジェクト研究員)

編集●石山 俊

世界の貧困人口はサブサハラ・アフリカや南アジアの半乾燥地帯に集中する。天水農業に依存する社会は環境変動に対して脆弱で、植生や土壌などの環境資源は人間活動に対して脆弱である。環境変動の影響から人間社会および生態系がいかに速やかに回復(レジリアンス)するか。貧困と環境破壊の悪循環をいかに絶つか。ザンビアをおもなフィールドに、その方策を探ってきたプロジェクトのリーダー梅津千恵子准教授に話を聞いた。

石山●梅津さんが「レジリアンス」という概念にはじめて出会ったのは……。

梅津●地球研がまだ春日小学校にあったころの読書会でとりあげた論集^{*1}です。ストックホルムのバイヤー研究所^{*2}の研究者たちによる先進国におけるレジリアンスの事例研究と理論とが収められていました。それがいまに至るきっかけでしょうか。

レジリアンスとアフリカの結合

梅津●じつはそのときに、この概念に基づく実証研究は、環境がより厳しい乾燥地や途上国においてこそ有用なのではないかと考えたのです。そこでアフリカをフィールドに、「レジリアンス」と「貧困」の概念を結びつけた研究を思い立ったのです。あるシステムの「脆弱性」を問題にするだけでなく、ショックを受けた後の「レジリアンス」にも目を向けることで、より建設的な議論ができるようになりましたね。

貧困から目をそむけられない

梅津●そうはいっても、「貧困」をテーマにした研究は、予備研究の段階では所内の理解がなかなか得られませんでした。石山●私もアフリカでフィールドワークをしますが、「貧困」とはなになのか、時としてわからなくなるときがあります。梅津●「貧困」とは、ある人がそのポテンシャルを十分に発揮しないで一生を終え



ザンビア南部州のフィールドサイトに設置したばかりの雨量計に集まる子供たち(2007年9月、撮影:梅津千恵子)

ることだと考えています。本来なら70歳まで生きられるはずなのに、子どものうちに亡くなってしまう。あるいは、ノーベル賞をとるような研究者になったかもしれないのに、学校に行けずその可能性が奪われるなどですね。

環境問題において「貧困」が重要なのは、それが地球環境問題の原因でもあり、結果でもあるからです。

石山●砂漠化の問題でも初期は「緑の回復」といった対処が主流でしたが、最近はこのに加えて「貧困の削減、生活水準の向上」がセットになってきましたね。

長いスパンの調査が欠かせない

石山●プロジェクトが設定したテーマのうち、もっともよく見えてきたのは……。梅津●食料消費の調査では、食料消費と

体重の増減の関係がはっきり出ました。当然といえば当然ですが、実証的な研究がこれまでほとんどなかった。

石山●降雨が不足してメイズ(トウモロコシ)がとれないと、サブサハラの人たちは食料消費を減らすのですか。

梅津●世帯の食料ストックが低下する端境期^{はざかいき}がどれだけ長くなるかが重要です。私たちと同じ調査地域で長年研究してきたスカッター氏^{*3}によれば、その対処こそが彼らのウェイ・オブ・ライフだと。そうしないと、サブサハラの厳しい環境で生き延びられない。そんな話を聞くと、やはり長い期間をかけての調査の重要性を思いしらされます。石山さんがご専門の人類学でも、同じ場所で20-30年もの研究の積み重ね、蓄積が重視されますね。石山●現在を見るだけでなく、歴史的な

*1 Fikret Berkes et al. (ed.) *Navigating Social-Ecological Systems: Building Resilience for Complexity and Change*. Cambridge University Press, 2003.

*2 The Beijer Institute of Ecological Economics

*3 Thayer Scudder カリフォルニア工科大学の人類学者

つづいて、専門は環境資源経済学。研究プロジェクト「社会・生態システム」の脆弱性とレジリエンスプロジェクトリーダー。二〇〇二年から現職。



いしやま・しゅん 専門は文化人類学。研究プロジェクト「アフリカ社会におけるなりわい生態系の研究」ポスドク石油時代に向けて「プロジェクト研究員」二〇〇八年から現職。



視点で変遷を考えます。

梅津●プロジェクトでは、歴史資料研究も視野にいれています。ザンベジ川にカリバダム(1959年完成)が建設される以前にコールソン氏が調査した本*があります。ザンビアは1964年に独立するのですが、植民地時代の一次文献にも目を配っています。ダムができる前の谷のくらしもインタビューで把握しています。

石山●プロジェクトの運営で、難しかった点にどんなことがありましたか。

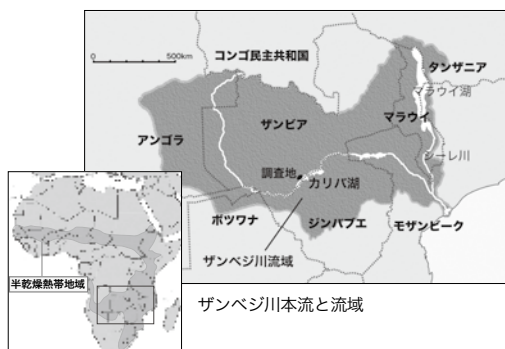
梅津●世帯調査と身体計測を集中的に実施していますが、もっと簡素にできる方法があれば他の調査機関でも容易にできるのですが……。

それに、長期調査が当初はやりにくかったこと。観測機器の設置もたいへんでした。気象ロボット2機と雨量計が48個。データ採取は、ゴミや木の葉がつまったりしてメンテナンスに手間をとられました。気象ロボットのケーブルがヤギに食いちぎられたこともありました(笑)。

成果を現地に接ぎ木する

石山●先ほど端境期の話がありましたが、現地の人たちは収穫が充分でないときはどう対処しているのですか。

梅津●ザンビアでは栽培環境が異なる、雨季作メイズ、乾季作メイズ、サツマイモを組み合わせ、降雨変動に対処します。農業以外では、人造湖のカリバ湖に近い低地では賃労働、中標高地域では材木やスレートの切り出しで現金を得ています。マーケットに近い地域では野菜の栽培で生計を立てていますね。



石山●西アフリカの半乾燥地では氾濫原での乾季作が重要です。ザンビアでのメイズ栽培も氾濫原利用ですか。

梅津●主に天水です。川沿いの湿地では乾季にはメイズのほか、野菜も栽培しています。ただ、雨季に洪水が起こると作物が全滅する危険があります。調査地域の雨季は11月から翌年5月くらいまでですが、いまわかっている降雨パターンは、12月と2月の大雨。12月の大雨はラニーニャ、2月の大雨はエルニーニョと重なる傾向があります。12月に大雨が降ると、せっかく蒔いたメイズの種が流されてしまう。そうなると高地の人たちはサツマイモを植え、サツマイモができない低地ではメイズをもう一度播種するしかない。

地元の人びとは降雨の傾向をある程度は経験的にわかっているようです。しかし、もっと正確に予測ができれば、より迅速に対応できるようになるはずですが。

石山●乾燥・半乾燥地開発だと、大規模なダムや灌漑施設を建設する発想になりがちですね。地域の人たちの従来のやり方を発展させる方向で「レジリエンス」を強化できればおもしろいのですが。

梅津●プロジェクトのサブリーダー宮崎英寿(地球研プロジェクト研究員)さんによると、農民は在来種よりも改良種を好む傾向にあるということです。

石山●「伝統知識!」と喜ぶのは、われわれ外の人間。

梅津●やはりオプションの提示は重要でしょうね。

石山●作物以外にどのような問題が……。

梅津●端境期のメイズ価格の高騰でしょうか。市場が機能しないのです。他地域の作物を流通させれば価格高騰は抑えられそうなのですが、これにはインフラの不備という問題がある。私たちの調査地から都市に通ずる道路にしても、土砂崩れで通行不能になることは珍しくない。

石山●農業面での対策と並んでインフラ整備が鍵ですね。

リーダーとして、研究者として

石山●プロジェクトは最終年度で、まとめの段階です。振り返ってみてどのようなことを考えていますか。

梅津●十分に調査しきれなかったこともあります。たとえば、低地から高地に移住した社会では牛の重要性が高まり、母系制から父系性に変化しつつあることがわかっています。興味深い点ですが、調べきれしていない。こうした「社会組織としてのレジリエンス」を試してみたかったですね。

研究者として言いたくても、リーダーとして言えなかったこともたくさんありましたね。そこにギャップを感じてしまうとプロジェクトは進まないでしょう。

石山●そうしたギャップが次のステップへのモチベーションになるでしょう。

梅津●もう一度生まれたら人類学者になりたいですね。リーダーとして管理に時間をとられてしまって、フィールドにあまり行けなかったのも残念でした。

石山●プロジェクトリーダーも、やはりフィールドには出たいですね。もしフィールドに長期行けるとしたらどのようなことをしてみたいですか。

梅津●もう少し広い範囲で調査してみたい。プロジェクトではポイントを絞りましたが、流域単位に広げてやってみたい。水産資源もおもしろいテーマですが、扱えませんでした。それらを取りまとめて、資源経済を考えてみたい。

石山●最後に一言お願いします。

梅津●社会科学の継続した調査は地球環境学にとって重要な課題だと思います。プロジェクトの成果を今後を生かすために、私も今後もフィールドに通い続けたい。地球研としても継続的社会科学研究への投資を考えていかなければならないと思います。

2011年4月6日 地球研「プロジェクト研究室」にて

* 4 Elizabeth Colson. *The Social Organization of the Gwembe Tonga*. Manchester: Manchester University Press, 1960. Elizabeth Colsonはカリフォルニア大学バークレイ校の人類学者

百聞一見——フィールドからの体験レポート

世界各国のさまざまな地域で調査活動に励む地球研メンバーたち。現地の風や土の匂いをかき、人びとの声に耳をかたむける彼らから届くレポートには、フィールドワークならではの新鮮な驚きと発見が満ちています



乳児死亡の背景を探る ラオス農村での人口調査

西本 太 プロジェクト研究員

にしもと・ふとし

専門は社会人類学。研究プロジェクト「熱帯アジアの環境変化と感染症」プロジェクト研究員。2009年から現職。

言葉の壁のある村で

「これ以上は時間の無駄よ。この人にはラオス語が通じないから。」若い看護師がさもうんざりしたようすで嘆いた。この日、私たちの調査チームは、妊娠出産経験のある女性たちを集めてインタビューをしていた。そこは少数民族の住む村で、女性たちが普段、ラオス語を使う機会はほとんどない。ある女性の見当違いな答えの繰り返しに、看護師はついに我慢ならなくなったようだ。当の女性はというと、照れ隠しに周りの女性たちとふざけ合っていた。

この村の5歳未満児（乳幼児）の死亡率はきわめて高い。昨年行なった調査の結果、乳幼児死亡率は最近でも出生1,000人に対し400人近くあることがわかった。これはラオス国全体の率1,000対80と比べても、きわめて高い（ちなみに日本は1,000対4程度）。この高い死亡率の要因を、昨年の調査では詳しく探れなかった。そこで今回、母親たちの出産育児行動と、死んだ子どもの年齢とその死因に焦点を

当てたわけである。

母親たちになるべく気安く話してもらうために、以前からプロジェクトを手伝ってもらっている看護師たちに応援を頼んだ。現地の診療所に配属されてまだ日は浅いが、仕事ぶりは頼もしかった。聞き取りを手伝うだけでなく、現地の出産育児文化への理解を深めてもらおうという期待もあった。

ところが言葉の壁は予想以上に高かった。母親たちはラオス語を知らなくはない。ただ、言い間違いを恐れ、リラックスして話してくれないのだ。それに、結婚前の性交経験とか、出産後何か月目から夫と同衾するかといった質問が並び、看護師たちの聞き取りもつい事務的になる。それが母親たちを余計に萎縮させるようだった。尋問のように空気がこわばったインタビューを何度も中断させる。どうすれば母親たちを打ち解けさせ、話を聞き出せるか、看護師たちと話し合った。

ありふれた乳児の死

どうにか聞き取りを進めると、多くの母親が、生後間もない子どもを死なせた経験をもつことがわかった。聞き取った104の死亡例のうち、実に64人の子どもが出生後一か月未満で亡くなっている。死因のほとんどは、下痢症や、破傷風に起因する高熱である。

母親たちは、子どもが死んだときのようすをじつに淡々と話した。ずいぶん前に死んだ子どもまでよく覚えているので、記憶自体は鮮明なようだ。インタビューに不慣れで、感情表現が抑制されたことも多少はある。それにしても、



売り物用のホウキを作る。抜け落ちが少ないので評判が高い

子どもの死という疎ましい話題にも、湿っぽいところがまったくない。ほっとするどころか、かえって不気味に感じるほどだった。

悲しくないわけではないはずだ。わが子を失った悲しみをだれもが実体験としてもっている世界では、それをことさら表出して周りの人たちと共有する必要を感じないのだろうか。生きることに必死のあまり、過ぎたことを省みる余裕がないのかもしれない。

生活の実態を知り、はじめてできること

この村の女性たちは現在も一人で、あるいは夫か母親の介助だけで、自宅で出産する。そして、わずか数日後にはきつい野良仕事に復帰する。母親が留守の日中、赤ん坊の世話をするのは年上の子どもか、祖母だ。赤ん坊が泣きじゃくると、よく噛んで柔らかくしたご飯をバナナの葉に包んで蒸し直したものが、乳の代わりに与えられる。新生児の下痢症はおそらくこれに起因する。だが、人びとは新しい家族を迎え入れるほかのすべを、これまで知らなかった。

こうした状況を改善すべく、現在さまざまな保健対策が講じられている。しかし、問題の背後にある、人びとの生活を成り立たせている前提条件に理解が及ばない限り、根本的な問題解決にはつながらない。人びとの生活の実態を踏まえてこそ、現実に即した改善策を練ることが可能になる。



看護師たちとインタビューの進め方を話し合う

出版しました



研究所としての出版物は、いまのところ一般向けの和文の地球研叢書だけですが、各プロジェクトや個々の研究者は、さまざまな媒体で研究成果を続々出版しています。新しい企画として、そのような出版物を著者みずからに紹介してもらうことにしました。どのような狙いで書いたのか、どの点をとくに読んでほしいのか、自薦の文章です。基本方針として若手の研究者を優先、将来的には地球研コミュニティに読んでほしい論文も取り上げたいと思います。



呪われたナターシャ 現代ロシアにおける呪術の民族誌

藤原潤子 著

人文書院 2010年6月 270ページ 定価2,940円

本書はソ連崩壊後のロシアにおける呪術リバイバルを描いたものです。2002年にフィールド調査を始めた際、「かつては呪術なんてまったく信じなかったけれど、今は信じる」と語る人びとに出会いました。ソ連時代に無神論教育・科学教育を受け、呪術など当然「迷信」と考えていた人でさえ呪術を信じることは、私にとって大きな驚きでした。辺鄙な村に住む老人ばかりでなく、大学に勤める研究者や元共産党員でさえ、このように語る人がいるのです。人びとは呪術的な世界観にどのようにからみとられていくのか？ そのプロセスを明らかにしたいと考えました。

本書の主人公は、自身や子どもの重い病氣、夫の浮気による家庭の崩壊、失業など、さまざまな不幸を経験した中年女性ナターシャです。彼女もかつては、呪術などまったく信じていませんでした。しかし周囲の人びとに勧められ、半信半疑で呪術的な治療などを試みます。その後偶然に事態が好転したことにより徐々に信じるようになり、ついには自分が祖母の代から続く恐ろしい呪いの犠牲者だと考えるようになるのです。

ナターシャが呪術を信じるようになった背景には、ポスト社会主義という社会状況があります。厳しい情報統制が敷かれたソ連時代、政権に都合の悪い情報が隠され

操作されたことは、今ではだれもが知る事実です。こうした歴史背景が、「ソビエト政権によって隠されていた真実」として呪術を人びとに発見させる素地となっています。これ以外にも、呪術の「科学的根拠」についての語り、マスメディアによる呪術知識の拡散など、説明しがたい体験が呪術によるものだと人びとに納得させる装置が、現代ロシア社会の各所に埋め込まれています。

呪術を信じる人びとを通して私が描きかったのは、どれほど不合理な命題でも、それを信じたい、論理的に説明したいという欲求が生じれば、人間は合理化の手段を見出さう、という事実です。本書により人間の認識がもつこのような脆弱性を、ささやかなりとも示したのではないかと考えています。

ふじわら・じゅんこ

専門は文化人類学。研究プロジェクト「温暖化するシベリアの自然と人」プロジェクト上級研究員。2009年から現職。



近代上海と公衆衛生 —防疫の都市社会史

福士由紀 著

御茶の水書房 2010年12月 322ページ 定価7,140円

上海は長江の下流、中国大陸東岸に位置します。現在では中国最大の経済都市として知られる上海ですが、かつては江南地域の水上輸送の一地方拠点に過ぎませんでした。

上海が都市として大きく発展するのは、1842年の南京条約による開港以後です。外国人居留地であるイギリス租界（後にアメリカ租界と合併し共同租界となる）、フランス租界が相次いで設けられ、これら租界を中心に商工業、金融業が発達し、他地域から多くの人びとが流入してきました。租界を中心とした近代的な都市建設は、やがて租界外の中国人居住地域（華界）にも広がります。

国内外の交通の要衝、国際貿易港として

発展した上海では、急速な都市化ともあいまって、さまざまな衛生問題が発生しました。感染症もその一つです。ヒトやモノの移動に伴い感染症が上海へ流入、あるいは上海から流出しました。人口が密集した都市の生活環境も、上海でのこうした感染症の流行を激化させました。

このような感染症の流行に対し、人びとはどのように対応したのでしょうか。これを明らかにすることが、本書のねらいです。そのために、19世紀半ばから20世紀半ばの公文書、公報、新聞、雑誌、各種文献を用い、コレラやペストといった感染症への具体的対策の様相を詳細に検討しました。

上海での感染症対策の歴史を描くにあたって、私がとくに留意したのは以下の2点でした。第一に、だれがどのように感染症対策に携わったのかを、長期的な政治・社会環境の変化を踏まえ明らかにすること。第二に、上海という街の国際性を踏まえ、国際関係の中で、上海での感染症の流行状況や対策の歴史を検討すること。

近代期、政治・経済面でのグローバル化が急速に進展する中で、アジア諸地域では近代国家建設が進められていました。いわゆる近代的公衆衛生もまた、近代国家、近代社会の要件の一つと考えられ、取り入れられていきます。本書は、こうした「近代性」が、上海という都市社会にどのように導入され、普及していったのか、そしてその間にどのような葛藤があったのかも描いています。本書から、公衆衛生という問題を通して見た、中国都市社会の近代経験の一端を感じ取っていただければ幸いです。

ふくし・ゆき

専門は中国近現代史、東アジア医療社会史。研究プロジェクト「熱帯アジアの環境変化と感染症」プロジェクト研究員。2010年から現職。

現在の地球環境問題研究の難しさ

福嶋義宏 (地球研名誉教授・鳥取環境大学特任教授)

私たちが地球研の第2年次プロジェクトとして実施した「近年の黄河の急激な水循環変化とその意味するもの」が終了して、3年経過した。その間、2回中国を訪れた。1回目は黄河プロジェクトの報告のためであり、2回目は鳥取県の受託費を得て、現勤務先の学生たちを連れて、河北省、内モンゴル半乾燥帯での中国当局による黄砂発生防止策の実施状況の視察である。降水量が多い日本では山地に植林することで、土砂流出の防止は、それなりに成功してきた。しかし、半乾燥地では、農業や牧畜などの生業に使える水量が減るので植林に積極的ではない。そのため政治・行政的な施策を伴わねば、維持が難しく、結局は土地の劣化や砂漠化は防げない。

北京や天津の工業化・都市化を進めれば、それだけ水需要が増える。当局は農民や牧民の水需要を抑制するため家畜頭数の制限や農地の一部を防風林へ転換するよう指導している。その結果、農牧複合経営と近郊蔬菜農業化での収入増のあった農民もある。ただし、全体として、植林化は放牧家畜数の制限による牧民の移住策や、農牧民の減少策などで維持されているように見える。それは同時に、樹木からの蒸発量を増加させ、地下水位が低下する傾向となるはずである。水利局の係官に聞いてみれば、予想通りであった。植林化は黄砂飛来を防ぐことはできるが、都市部への水供給を増やすことはできない。

話は変わるが、著名な経済学者の中谷巖さんはかつて、日本における各種の規制撤廃により経済活性化を進める旗振り役を演じていた。最近書かれた文庫本『資本主義はなぜ自壊したのか』では、グローバル化は結局のところ、先進国、とくに米国では中間所得層が分解

して、一部の富裕層と大多数の貧困層に分離してしまったと反省を込めて書いている。金融に特化し

た資本主義が、本当の幸せ感を喪失させてきていることを憂慮している。これは、政治制度は違うが、アフリカ北部や中東諸国での独裁的な政治に対する人びとの反乱も、社会的な貧困と支配層の不正蓄財に根があることと類似しているように、私には思える。では、日本はどうか。日本企業は利益を出しても従業員の給与増に回さず、株主や社内留保用に回している。関税を無くす方向に一方的に進めば、日本も米国ほどではないにしろ、所得分布が米国型に近づくことが憂慮される。

一方、ニュージーランド、クライストチャーチの地震報道では日本の地震学者が正直に、「いつ、どこで、どの程度の規模でという意味では地震の予知はできない」と語っている。

間をおかず、本年3月、日本でも東北・関東沖でマグニチュード9.0という巨大地震が発生し、途方もない津波が多く市の町村を消滅させ、多くの人命が失われた。呆然とする間もなく、東京電力の福島原発から放射能漏れが起こった。まだ、終息するまで危険な作業と長い時間がかかるであろう。雑誌 TIMEの3月28日号では、世界各国の供給電力に占める原発の比率が示されていた。日本は30%程度で、他国に較べて特段に高い比率ではないが、地震国であることを念頭に入れておく必要を改めて認識させられた。

地球研は、理系・文系の壁を越えてプロジェクトを組まないといけないような、「なぜ」を主題とした上で、解決すべき重要な課題を見いだすこと、そして説得可能な仮説を提示して、信頼性の高いデータで実証する以外に、社会から評価されることはないと思っ

ふくしま・よしひろ

京都大学農学部では、森林の土砂流出量や水収支への地被覆効果を、観測・実験とモデル化から明らかにする研究を仲間たちと行ってきた。名古屋大学大気水圏科学研究所に転任してからは、ユーラシア東部の熱帯から寒帯までの広域面の観測プロジェクトの事務局役とシベリア研究班を担当。仕事は広がり、大気-陸面間の水・熱循環となった。現在は苦手な化学も取り込み、流域の水・物質循環の仕組みを理解したいと思っている。また、現大学の学生たちに半乾燥地の自然と人の生活を理解させたいと、2010年秋、県の受託費を得て、中国への視察旅行を行った。



鳥取環境大学のキャンパスと筆者



内モンゴルの広大な草原に足を踏み入れた鳥取環境大学の学生たち

目指していたものに向かって自信をもって進んでください

中尾正義 (地球研名誉教授・人間文化研究機構理事)

地球研が創設される前から、学問分野が極端に細分化されてきていることが問題になっていました。個々の狭い学問領域における「タコ壺化」をなんとかしなければいけないと考えられていたのです。そういう意識が急激に強くなった背景の一つが地球環境問題の顕在化だったといえるでしょう。総合的に取り組むほかはないというわけです。

地球研創設にかかわっていた当時、「地球研には先端性は不要である」、必要なのは「妥当性、あるいは適切性」ではないか、などという議論が活発でした。というのは、地球環境問題が

生じた背景は、バランスを欠いた「発展」ではないか、という認識があったからです。地球環境問題というモンスターが生まれたのは、それぞれの研究分野が個別に「最先端」を求めた結果ではないかというわけです。

図示したのは、地球研創設の概算要求時に描いたモンスターです。空を飛びたいと思って「翼」を作り、海の中で自

由に動けるように「尾びれ」や「水かき」を開発し、水中からの視界を確保するために「潜望鏡」を装着し、早く走れるように「車輪」を身につけ、よく聞けるように「耳」を大きく進化させた結果、先端的な個々の能力は飛躍的に「発達」したが、全体としてバランスを欠いた地球環境問題というモンスターができてしまった、という説明です。

地球研の創設を要求する過程で、なぜ研究機関が必要なのか、と聞かれました。大型の研究費の手当てだけではだめかとのこと。従来の学問から脱皮して真に総合的な取り組みを行うには、分野の異なる研究者が机を並べて日常的に交流する場の設定が不可欠だ、と主張して組織の形成が認められたのでした。研究室が廊下で結ばれていた地球研の建物の当初の設計を、研究室が通路を兼ねるように変更したのも、「日常的に交流する」必要があるという意図を実現しようとしたものです。

故日高前所長のいわゆる、良質な異なる素材を混ぜ

合わせた「五目チャーハン」を生み出す地球研という「フライパン」のたとえ(竹内望「上賀茂の『五目チャーハン』」本誌17号参照)は、まさにここに根ざしています。

こうして地球研はできました。プロジェクトの成果を海外で発表すると、経験をした方も多いと思いますが、ものすごく評価されます。その原因は、日常的な交流を基礎にして生まれた真に「総合的な」成果だからではないでしょうか。完璧ではないにしても、異分野の研究者の知恵をよく混ぜ合わせた「五目チャーハン」としての風味があるからでしょう。

「総合的な」取り組みはわが国特有ではありません。諸外国でも力を入れています。米国でも当時から、総合的研究に特別資金を手当てして地球環境問題に対応しようとしていました。しかしNSF(米国国立科学財団=National Science Foundation)との懇談の席で「日本は組織を作るのか!」と感心されました。組織を作った

のはわが国が最初なのです。異なる分野の人びとが出会い、互いに理解し、なにかを生み出すには時間と場所が必要です。地球研という場ができて、このことはかなり加速されたと思います。

最近は評価ばかりです。「成果は?」と短兵急に問われるのもわかります。しかし、まったく異なる分野を糾合して人間の知恵を生み出すという課題は簡単なものではないはず。焦る必要はありません。右顧左眄する必要もありません。目指していたものに向かって、一歩ずつにしる、進んでいることに、自信を持ってください。自信を持って歴史の法廷に立つ気構えを持ってください。

なかを・まさよし

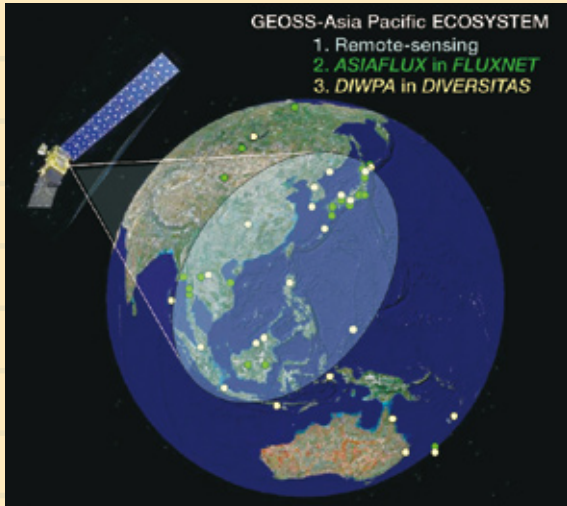
名古屋大学大気水圏科学研究所在職中に文部省学術調査官として地球研の創設にかかわる。地球研が創設された2001年4月から2008年3月まで在籍し、オアシスプロジェクトなどのプロジェクトを実施。中国環境問題研究拠点の初期のリーダーを務める。2008年4月より現職。



21世紀の新しい環境観

—持続性は直線で示せるか? 答えはYES

和田英太郎 (地球研・京都大学名誉教授)



GEOSSに関連したアジア陸域観測地点
(JAMSTEC・海洋開発研究機構 石井勲一郎氏による)

国際共同研究「全球地球観測システム (Global Earth Observation System of Systems: GEOSS)」が動きだしている。地球の理解を深化し、だれもが環境問題を対等に議論できるようにするために、地上観測網や海洋観測網が整備され、さらに人工衛星の情報が増加し、コンピュータの進歩に伴う数値実験も急速に発展した。21世紀は環境変動下における持続可能性を探る世紀であり、技術開発によってヒトが時空間の壁を突破する時代となるであろう。

一方、自然界の、とくに生物界を切る視座も大いに進み、DNA解析、安定・放射性同位体測定法を導入した自然生態系・ヒトの社会システムにおける物質循環の研究法も野外調査地の全球レベルでの配備と併せて大いに発達しつつある。ヒトの社会はその歴史上初めて観測から予測モデルの構築、そして社会への伝達と社会システムの形成に至る道筋を手中にしつつある。このような状況下で、文理統合を意図する地球研になにを期待するか? 回答の第一歩は新しい視座へのキーワードを社会学者から提示し、それを理工農系が定量化し、きわめてわかりやすいかたちで社会に発信することだと思われる。

一例として食物連鎖の持続性 (サステナビリティ) を、われわれ動物のアミノ酸の代謝系のレベルの炭素・窒素の同位体効果で探るとい話をしたい。食物連鎖というもの自然界のいろいろな生態系にあって、たとえばモンゴルでは、牧草から家畜、オオカミ、人間にまで続いている。その他の生態系ではトラ、ワシ、シ

ロクマなど、食物連鎖のトップにいろいろな生き物がある。連鎖の中の動物たちは、そこにいる植物や微生物が作った必須アミノ酸、他のアミノ酸、あるいは重金属を効率よく使って、地産地消の制約下で食物連鎖が維持される。しかも自然界では、腐食連鎖も含めると、動物は Recycle/ Reuse/ Reduce の 3R の世界にいることが想像される。

横軸に連鎖の動物の炭素の同位体比 $\delta^{13}\text{C}$ の量、縦軸に窒素の同位対比 $\delta^{15}\text{N}$ の値を取ると、いろいろな生態系の食物連鎖に沿って直線が近似できるようなのである。この直線が近似できるとは、植物を食べる植食性の動物、それを食べる動物との間の炭素・窒素同位体効果の比率が連鎖を通じて一定であることを意味する。つまり、式に書くと、 $\delta^{15}\text{N}(\text{動物})=a \cdot (\delta^{13}\text{C})+b$ である。いま検討中ではあるが、この式はいろいろな生態系で成立しているように見える。

視点を変えると、この式は各生態系の食物連鎖の持続性を示す直線とも言える。具体例としてはモンゴルではチンギス・ハーン以来、この直線は一定に保たれてきたと考えられるが、近年の家畜の過放牧やヒトの食料需給の変化が植生や食物の変化に反映され、羊やヒトがこの直線からずれた値をとるようになってきていることが予想される。

このように人文社会的基本概念を図上にわかりやすく定量化し、社会に発信することも今後の地球研に期待したい。

繰り返しになるかもしれないが、21世紀の地球環境観はつねに変化しながら、新しいパラダイムを構築してゆく。そのため観測・モデル化、シミュレーションによる予測を一体化させる研究があたりまえとなり、文理統合を踏まえた順応的環境管理:PDCAサイクルへの貢献がすべての人に求められる時代に入る。そういうヒトの世のあり方に先んじて、わかりやすく問題提起をすることが地球研に求められるようになってきたと思われる。



わだ・えいたろう

専門は同位体生物地球化学。東京教育大学、東京大学海洋研究所、テキサス大学海洋研究所、三菱化成生命化学研究所、京都大学生態学研究中心を経て、2001年から2004年まで地球研教授。2004年8月から2011年3月まで海洋開発機構フロンティア地球環境研究センター所属。現在の研究テーマは安定同位体を用いた食物連鎖の解析。

所員紹介—私の考える地球環境問題と未来

縄文人の ココロを読む

中村 大

(地球研プロジェクト研究員)

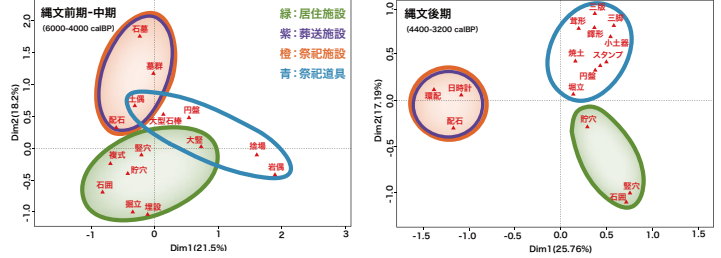
私の専門である考古学は、物質文化(モノ)を手がかりに過去の人間や社会を理解します。職業癖でさまざまなモノに興味があり、本職の縄文時代資料のほかに、和鏡(古代-近世の銅鏡)や仏像、陶磁器にも関心があります。

多弁なモノの声を解析する

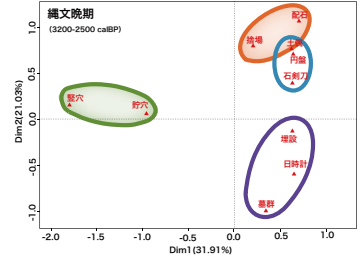
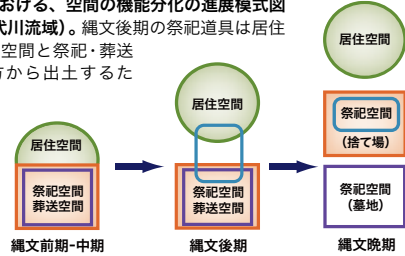
最近、多変量解析や GIS (Geographic Information System) を用いて、縄文人の場所やモノに対する価値観やイメージを視覚的に示す「縄文人の空間意識分析」を進めています。ここでは、多変量解析の一つである対応分析(コレスポンデンス分析、数量化三類ともいう)を用いた研究を紹介しましょう。アンケートから顧客のもつイメージやニーズを明らかにする、現代の商業分析でよく使われる手法の、考古学への応用です。

遺跡に残された建物跡や道具には場所の機能や当時の人びとの活動内容が反映されており、いわば縄文人の空間意識が物質化されています。つまり、遺跡の調査を介して縄文人への間接的なアンケートを試みるわけです。

図は秋田県北部、米代川流域の、居住・祭祀・葬送空間に関連する資料です。対応分析の結果を時期別に散布図に表現すれば、文化的空間の機能分化や関係性の巨視的な変遷が辿れます。模式図からは、縄文人の空間の使い分けの流儀(空間認識)が時期とともに変化し、空間の機能



縄文時代における、空間の機能分化の進展模式図(秋田県米代川流域)。縄文後期の祭祀道具は居住空間と居住空間と祭祀・葬送空間の両方から出土するため、両空間を繋ぐような役割と推定した



分化が進むようすが読み取れます。中期には、居住空間(緑)と祭祀(橙)・葬送(紫)空間は近接して配置されることが一般的でした。後期になると、居住空間と祭祀・葬送空間が分離し、大湯環状列石(秋田県鹿角市)など大規模な祭祀・葬送空間が発達します。祭祀道具類(青)は、居住と祭祀・葬送空間の中間的位置をとりま。離れた両空間を繋ぐ役割を果たしたのでしょう。晩期は空間の機能分化がさらに進み、居住、祭祀、葬送の三空間の独立性が明瞭になります。

このように人文系研究に多変量解析や GIS を活用する利点は二つあります。第一にデータ選択から解釈まで研究過程が明示的に再現可能であること。第二に分析結果をヴィジュアルに分かりやすく表現できることです。とくに第二点は、歴史学が学際研究に参画するときにとっても役立ちます。

考古学の知見は 未来の景観に活かされる

三内丸山遺跡(青森市)や大湯環状列石(鹿角市)、伊勢堂岱遺跡(北秋田市)などのストーンサークルが世界遺産暫定リストに登録され、北日本の縄文遺跡群は世

界的な注目を集めています。秋田県生まれという縁もあり、私はその登録活動に参画してきました。

縄文遺跡とその考古学的研究成果を、現代社会にどのように価値付けるのか。世界遺産の本登録をめざす活動は、歴史的景観へ新たな現代的価値を付与する「温故創新」への挑戦です。換言すれば、ローカルな歴史的景観の価値をグローバルに発信することです。この挑戦が地域社会に及ぼす影響には、景観問題への潜在的なリスクも存在します。未病の段階にある環境問題を察知し対処することも、設計科学の一つのあり方でしょう。まずは、地域社会と研究者とが議論を重ね、地域スケールでの活用計画を立てる必要があります。そのときに、今回紹介したように、視覚的な表現を駆使し、地域史の全体像や遺跡の歴史的価値を地域の人びとに分かりやすく説明することは重要です。

一連の研究は新聞で紹介され(読売新聞2011年3月22日夕刊)、ESRI Pacific User Conference (2011年1月)で Most Aesthetic Map Awardを受賞するなど注目を浴びています。これからも地域景観の未来可能性に貢献できるようながばります。



2009年2月、Do You Kyoto?の地球研ブースでは、担当全員で各国の民族衣装を着て解説などを行いました。私(後列左)が着ているのは所長室に飾ってあるカザフスタンの伝統衣装です

■リーダーからひとこと
内山純蔵(地球研准教授)
景観史の理解に向け、私たちのプロジェクトでは、考古学だけでなく、人類学や地理学、言語学、生物学などの分野が集まっています。遺跡や歴史記録などの地誌情報のデータベース化と GIS 分析は、異分野間の活動を共有し景観として統合するため、とても重要です。中村さんたちの活動に大いに期待しています。

なかむら・おおき
■略歴
1997年~2002年 國學院大學文学部助手
2003年~2005年 英国セインズベリー日本藝術研究所半田考古学フェロー
2008年より現職
■専門分野 考古学
■地球研での所属プロジェクト
「東アジア内海の新石器化と現代化—景観の形成史」
■研究テーマ 日本列島の新石器化期データベース構築とその解析
■趣味 古美術(鏡・仏像・陶磁器)、甘味
■最近やりたいこと 能を観たい。謡と仕舞をもう一度習いたい

2010年度 EPM (Environmental Policy Making) 勉強会の活動について

話し手 ● 谷口真人 (地球研教授) × 窪田順平 (地球研准教授) × 檜山哲哉 (地球研准教授) ×
松永光平 (地球研研究員) × アイスン・ウヤル (地球研助教)

編集 ● アイスン・ウヤル

地球研のミッションは地球環境学の構築である。日本であれ海外の調査対象国であれ、環境政策に関与することは研究所の本来の目的ではない。とはいえ、われわれの研究は調査対象国の環境政策と無関係ではありえないし、当該国の環境政策に反映されない研究に意味はないだろう。さらに高いレベルの地球環境学を構築するには、将来の環境政策を見通しておく必要もある。

そこで2010年春に「Environmental Policy Making (EPM) 勉強会」を立ち上げた。研究プロジェクトと環境政策とをどのように結びつけるのか。環境と開発にかかわる地域、国、国際の各レベルの政策決定メカニズムに研究の成果をどのように活かしてゆくのか。ほぼ月1回のペースで重ねてきた勉強会の構造とこれからの方向について議論した。

ウヤル ● 勉強会をスタートさせるに当たり、谷口先生とともに EPM 勉強会の目的とあり方などを検討しました。その時点での問題意識について、まず谷口先生からご説明いただけますか。

なぜいま政策の議論なのか

谷口 ● 第Ⅱ期に入った地球研ですが、終了プロジェクトの成果や研究者ネットワークをどのようなかたちで国や地域の政策メニューに関連づけるのか、そうしたことを議論する場と機会をつくりたかったのです。私のプロジェクトでコンソーシアムを計画していたこともあって、とくに政策と科学の関連性についてフランクに議論したかった。

ウヤル ● そう、地球研で実施している調査や研究などの学術的な成果を環境政策に反映する可能性を議論したいとのことでしたね。それでは、EPM 勉強会によくご参加いただいているみなさんの関心はどのようなものか教えてください。

窪田 ● 私たちが研究プロジェクトで実際に直面している環境問題を解決するには、環境ガバナンスが重要です。これを多面的に議論したいと思っていました。



第45回地球研セミナーとの共催で行なわれた第2回 EPM 勉強会

松永 ● 研究の成果のフィードバックを柱に、政策立案に関する総合的な議論ができる場として興味がありました。

檜山 ● 私の本来の興味は、第Ⅰ期中期計画で行なった認識科学的研究です。しかし、第Ⅱ期中期計画で地球研が設計科学を目指す以上、環境ガバナンスや政策メニューの提示に向けた研究を指向する必要がありますと思うようになりました。ただ、地域や国による体制の違いは意識する必要がありますと感じながら、参加しました。

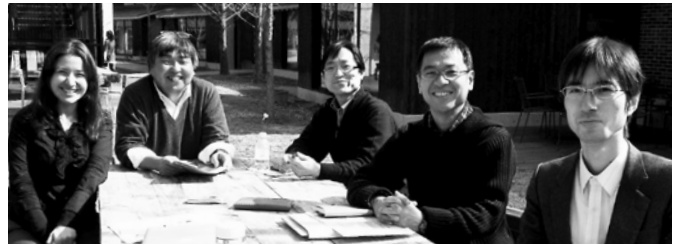
認識科学から設計科学へ
——政策にどう関わるのか

ウヤル ● 設計科学を軸にする第Ⅱ期の地球研では、分野によって異なるイメージがある「ガバナンス／政策／政治経済」についてもっと深く議論すべきだと思いますが、いかがでしょうか。

窪田 ● ガバナンス研究には認識科学、設計科学の両面があります。たとえば、過去のガバナンスの理解は認識科学の範疇でしょう。ガバナンスと政策メカニズムを理解する認識科学的な研究から政策立案につながる設計科学に進むには、少しハードルがあるのではないのでしょうか。

谷口 ● 過去の政治経済システムでうまく

いかなかった問題、たとえば温暖化対策の新しい枠組みを設計科学として考えることで次の政策のデザインにつながる。コンソーシアムに関する議論もそうです。窪田 ● コンソーシアムはすぐに政策立案に結びつかなくてもよいのではないかと思います。研究者の政策決定に関する意識を高める方法の一つだと思えばよい。自然科学者と社会学者が共同してコンソーシアムを考えるとところがおもしろい。檜山 ● 環境問題が国境を超える場合、コンソーシアムの役割は重要です。もちろん、重要なのはその中身です。政治的な課題は政府や行政機関に任せ、地球研は環境問題の解決に資する研究や調査を行ない、得られた知見を関連研究機関や共同研究者間で共有する。そうすれば、コンソーシアムは有効に働くはずですよ。谷口 ● 私のプロジェクトが現在計画しているコンソーシアムには三つの目的があります。政策立案はもちろんですが、共同研究のあり方を議論するフレームワーク、モニタリングとモデリングです。最後のモニタリングとモデリングを目指す部分は、自然科学者の直接的な貢献を求める側面です。一つの地域でも、環境問題を引き起こす側と影響を受ける側とが



右から
まつながこうへい
専門は地理学。地球研中国環境
問題研究拠点研究員。人間文化
研究機構地域研究推進センタ
ー研究員。二〇〇九年から現職。
たにくちまこと
専門は水文学。研究プロジェクト
「都市の地下環境に残る人間活動
の影響」プロジェクトリーダーを
経て研究推進戦略センター戦略
策定部門長。二〇一一年から現職。
ひやまつや
専門は生態水文学、水文気象学。
研究プロジェクト「温暖化するシ
ベリアの自然と人—水環境を
はじめとする陸域生態系変化へ
の社会の適応」プロジェクトリ
ーダー。二〇一〇年から現職。
くぼたじゅんへい
専門は水文学、森林水文学、砂
防学。研究プロジェクト「民族
国家の交錯と生業変化を軸とし
た環境史の解明—中央ユーラシ
ア半乾燥域の変遷」プロジェクト
リーダー。二〇〇二年から現職。
あいすんじやる
専門は国際関係論、国際政治経
済。研究推進戦略センター助教。
二〇一〇年から現職。

あり、多国間の歴史的・政治的關係によつてコンソーシアムの概念も変わります。これは議論の重要なテーマの一つです。

中国の環境政策にわれわれができること

ウヤル●EPM勉強会では、中国の環境の現状についての研究や政策メカニズムに関してくり返し議論しましたね。

松永●日本で行なわれている中国の環境研究を中国の環境政策に還元することは意義があります。したがって、中国国内の環境研究と政策プロセスとの関係を議論する必要もある。

窪田●第I期の地球研では、多くのプロジェクトが中国で調査しました。その成果をガバナンスの視点から比較すると興味深いデータが得られるでしょう。

谷口●中国の環境対策の政策メニューを検討することも重要です。

檜山●最近では中国以外の人々が中国のデータを自由に入手することが難しくなりつつあります。共同研究契約などを通して日中の研究者の相互理解と情報交換を深める必要があります。コンソーシアムはそういう機能を果たさねばなりません。

ウヤル●そのとおりです。私たちの共同研究でも経験しましたが、政策や政策決定にはグローバルからローカルまでさまざ

まなレベルがあります。最近の国際社会における政策決定のあり方がトップダウンかボトムアップかについても認識を深める議論をすべきです。

国の政策決定プロセスのあり方を問う

谷口●国の政策がトップダウンになるかボトムアップになるかも擦りあわせが必要で。どこが政策を主導するのかも不明です。IPCC (Intergovernmental Panel on Climate Change) のような立場と各地域独自の活動とのギャップを埋める枠組みも必要でしょう。最近ではベルモント・チャレンジ*として、地域の環境と開発を同時に考える政策と科学との関連性が議論されていますね。

窪田●トップダウン、ボトムアップのいずれかとは一概に決められない。一つの国でも地域によって異なるでしょうし、一国の政策を国際的な枠組みに組み込む場合には新たなトップダウンの型が必要になる。どちらかと考えるのではなく、賢い組み合わせを考えるべきでしょう。

議論の基軸は「政治・経済・環境」に

ウヤル●勉強すべき課題がたくさん出ましたね。これから会をどんなかたちで続

けるべきかについて聞かせてください。窪田●環境政策と経済政策の関連について、環境対策の実効性に基づく議論をしたい。経済問題からスタートするのではない、むしろ環境対策協力が、政治経済を含む包括的な協力に発展することが今後多くなることへの期待感を示したい。

檜山●同感です。環境経済の視点と環境ガバナンスの事例を、国レベルの環境政策も含めて共有しながらメリット、デメリットを議論したいですね。EPM勉強会は今後、トップダウン対ボトムアップ、環境経済、国際・国内・地域といった視座で続けられればよいと思います。

谷口●初年度に議論したテーマを政治学、経済学と環境研究の面からまとめる議論がほしい。昨年度あまり出なかったグローバルイゼーションの話もしたいですね。

松永●そうですね。政治と経済と環境の結びつきを考える方向でこの勉強会を続けられたいと思います。とくに環境に関する政府間対話とわれわれの環境研究との繋がりもおもしろいと思います。

ウヤル●その「政治・経済・環境」の三本柱を議論する「EPM合宿」をぜひ実現させましょう。

2011年2月23日 地球研「中庭」にて

2010年度のEPM勉強会の実績

回	開催日	発表者	タイトル (＊がついた回は英語で発表と議論がなされた)
1	5月13日	花松泰倫(地球研研究員)	アムールプロジェクトの政策立案への取り組みについて Policy Planning Operations of the Amur Project
2	6月29日	米本昌平(東京大学先端科学技術研究センター産学官連携研究員・特任教授)	地球環境問題にアカデミズムはどう貢献するのか—志としてのアジェンダ設定 How can Academism Contribute to Global Environmental Issues? Agenda Setting as Commitment
3	7月29日	BAO Maohong (北京大学/地球研招へい外国人研究員)	中国の学術機関と環境政策策定 * Academic Institutions and Environmental Policy Making in China
4	9月30日	Aysun UYAR (地球研助教)	地球研における「環境政策の決定メカニズム」研究のアジェンダ設定 Agenda Setting for the Environmental Policy Making Studies within RIHN
5	10月28日	窪田順平(地球研准教授)	中国の環境政策実施過程における地方政府の役割—中国西北部・黒河流域の「節水政策」を事例として Role of Local Governments within the Chinese Environmental Policy Implementation Process: The Case of Water Conservation Policy in the Heihe River Basin, Northwestern China
6	11月29日	Karen Ann B. JAGO-ON (地球研研究員)	アジアにおける都市水コンソーシアムの成立について * Formation of a Consortium on Urban Water in Asia
7	1月26日	谷口真人(地球研教授) Aysun UYAR (地球研助教) Karen Ann B. JAGO-ON (地球研研究員)	研究コンソーシアムの設立に向けて: 都市水コンソーシアムの事例 * Establishment of a Research Consortium: Special Focus on Urban Water Consortium
8	3月7日	白岩孝行(北海道大学准教授)	アムール・オホーツクコンソーシアム設立以降の戦略 The Strategy after Establishment of the Amur-Okhotsk Consortium

*2009年6月、国際科学会議 (ICSU) と各国・機関代表がアメリカ合衆国メリーランド州ベルモントに会し、地球環境の変化に関する研究への国際的な資金配分と優先順位を定める戦略策定を各国政府に求めるアピールを発した。これが人間活動と地域的環境変化への適応のための知識の活用をめざす「ベルモント・チャレンジ」である

出版物紹介

『総合地球環境学構築に向けて—地球研10年誌』
Towards Environmental
Humanics of the Earth System:
The RIHN 2001-2010

発行 総合地球環境学研究所
2011年3月 A5判 304頁
ISBN978-4-909325-64-5

創立10周年記念事業の一つとして、創立からの歩みを総括した書物を刊行しました。

地球研最初の「要覧2001」(2001年12月刊行)に掲げられた設立趣旨—地球環境問題の解決に貢献するために、「人間の文化の問題」と「人間と自然系の相互作用環」と「未来可能性」との視点に立って、既存の学問分野の枠組みを超えた、「総合的視点にたつ地球環境学」ともいべき学問の構築をおこなう—この壮大なミッションをもった研究機関がいかに構想され、10年のあいだにどのように進捗したか、今後どのような展望があるのか。

本書は、10年の流れがわかるように時代順に四つの章に分けて構成し、創立からの歩みできるだけ客観的に事実の積み重ねとして記録に残したものです。各章の末尾には、研究活動に関わる現場の声として中堅・若手研究員によるコラムを挿入しました。

また補遺として、エッセイでも知られた故日高敏隆初代所長の短文のうち地球研に関わるものをセレクトして「地球研断章」として収録、その後に続く巻末の資料では、地球研の研究および管理スタッフ、また研究活動、成果公開活動や社会活動などさまざまな角度から地球研のこれまでを紹介しています。

※書店販売はしていません。所内で閲覧いただけます。下記までお問い合わせください。

●問い合わせ先 地球研
TEL: 075-707-2100(代)
FAX: 075-707-2106
e-mail: info@chikyu.ac.jp

地球研叢書『魚附林の地球環境学—親潮・オホーツク海を育むアムール川』

白岩孝行著 2011年3月
昭和堂 定価2,300円+税

「世界有数の水産資源を誇る親潮・オホーツク海。この豊かさはどこから来るのか？ その解明に挑んだ科学者がたどりついたのが、日本で江戸時代から受け継がれてきた(魚附



林(うおつきりん))という概念だった(本書の帯の紹介文)

本書は、地球研が実施したプロジェクト「北東アジアの人間活動が北太平洋の生物生産

に与える影響評価(略称:アムール・オホーツクプロジェクト)」の成り立ち、途中経過、そして成果を多くの方に知っていただくためにとりまとめた書籍です。

日本の北にある親潮とオホーツク海が豊かな原因は、アムール川流域の森林や湿原で生み出され、アムール川によって運ばれる「鉄」にあるとわれわれは考えています。冬期に結氷するオホーツク海が作り出す海洋の鉛直循環、千島列島で生じる潮汐混合、さらには栄養が豊かで植物プランクトンの生産には鉄だけを外部から必要とするオホーツク海や親潮の海洋環境の存在。これらがひとつずつ組み合わさって、アムール川流域から親潮へと至る壮大な鉄の流れと、それによって支えられる生態系が成り立っています。規模こそ違いますが、これはまさに魚附林と呼ばれる日本で発達した森と川と海のつながりに他なりません。

20世紀以降、急速に進行する温暖化とアムール川流域における土地利用の変化は、この鉄の流れに大きな変化をもたらしつつあります。魚附林の存在を経験的に知っていた日本の漁師たちが上流の山やまに木を植えたように、オホーツク海や親潮に依存して暮らしているわれわれ日本人は、いまこそ、上流の国々に人びとと協力し、この巨大魚附林とも呼ぶべき壮大な環境システムの保全を目指すべきだと思います。

日中露モンゴル、4か国の研究者が協力し、アムール・オホーツクコンソーシアムと呼ばれる越境環境保全のための多国間学術ネットワークを立ち上げる経過が本書のもうひとつのハイライトです。上流-下流問題という古くて新しい地球環境問題に、北東アジアの国々に研究者、行政、政治、そして市民がどう取り組むべきか。本書を通じて多くの方に紹介できればと考えています。(白岩孝行)



研究成果の公開

研究連絡誌『SEEDer』(シーダー)
地球環境情報から考える地球の未来

編集:『SEEDer』編集委員会(編集長 秋道智彌)
発行:昭和堂
定価1,500円+税
第4号 2011年3月発行
特集 水田がつなぐ知恵—水循環をめぐる



DVD
『食の文明と未来—風土から未来の食を考える』

企画:地球研「農業が環境を破壊するとき—ユーラシア農耕史と環境」プロジェクト
監修:佐藤洋一郎 2011年2月発行
紀伊國屋書店 定価3,800円+税

このDVDは、2011年3月に終了した研究プロジェクト「農業が環境を破壊するとき」が、その締めくくりとして、2010年9月18日から2011年1月16日まで国立科学博物館(東京・上野公園)で開催された企画展「あしたのこはのために」をベースに制作しました。プロジェクトが研究成果として蓄積してきた映像と画像を用い、ユーラシアの風土に根付いたイネ、ムギ、イモを中心とした作物とそれを主食とする人びとの暮らしぶりをいきいきと表現しています。ナレーションを地球研の研究員が担当、長い歴史における食と農業のかかわりの重要性をわかりやすく解説し、今後の課題を提示しています。企画展の図録に代わるばかりでなく教材としても最適ですので、老若男女問わずぜひ多くの方がたにご覧いただき、未来の食と農業を考えるきっかけとなれば幸いです。(木村栄美)

地球研プロモーションビデオ紹介

10周年を迎え、より多くの皆さまに地球研を知っていただくこと、紹介ビデオを作成しました。地球研ホームページからご覧いただけます。(日本語版・英語版あり)



DVD 『アジアの都市地下環境』

作成：地球研「都市の地下環境に残る人間活動の影響」プロジェクト(リーダー 谷口真人)
日本語版・英語版

このDVDは研究プロジェクト「都市の地下環境に残る人間活動の影響」の成果を一般向けにまとめたものです。①「アジアの都市地下環境」オリジナルアニメーション、②アジア7都市(東京、大阪、ソウル、台北、バンコク、ジャカルタ、マニラ)における地下環境問題の概要、③7都市の都市環境情報(グラフ、地図データ)、④4都市(東京、大阪、バンコク、ジャカルタ)の地下水涵、⑤アジア全域の陸水変動などが収められています。

●問い合わせ先
地球研 研究推進戦略センター
谷口真人 TEL:075-707-2255

研究動向

2011年度 新FS紹介

3月4日に行なわれたIS(インキュベーション研究)報告・FS(予備研究)移行発表会の結果、下記4件の研究課題が2011年度連携FS(連携予備研究)に移行することが決まりました。また、研究プロジェクト所内審査委員会における再審査の結果、下記◎印の1研究課題が2011年度連携FSに承認されました。

FS(Feasibility Study)研究課題名	責任者	所属
高分解能古気候学と歴史・考古学の連携による気候変動に強い社会システムの探索	中塚 武	名古屋大学大学院環境学研究所教授
東アジア生業交錯地域における水と人間の歴史と環境	村松弘一	学習院大学東洋文化研究所准教授
メコン川に依存する人々の食・栄養と疾病の変遷—環境免疫学の展開	渡部久美	琉球大学熱帯生物圏研究センター教授
地球環境および地域発展制約下での下流汚染蓄積型湖沼の水環境問題と未来可能性	福島武彦	筑波大学大学院生命環境科学研究所教授
◎ 石油希少時代の農をデザインする	間藤 徹	京都大学大学院農学研究所 教授

2011年度 新研究プロジェクト紹介

3月10日に開催された地球研運営会議において、下記の研究課題が2011年度研究プロジェクトに移行することが認められました。

研究課題名	プロジェクトリーダー
統合的水資源管理のための「水土の知」を設える	渡邊紹裕
砂漠化をめぐる風と人と土	田中 樹

2011年度 新インキュベーション研究紹介

平成23年度インキュベーション研究(IS)について、下記5件の課題を採択しました。

研究課題名	責任者	所属
モンスーンアジア地域におけるリソース・チェーンの解明	横山 智	名古屋大学大学院環境学研究所准教授
永久凍土圏生態系サービスに対する環境リテラシーの構造化	石川 守	北海道大学大学院地球環境科学研究院准教授
小規模社会を基礎とした人間と環境の新しい相互関係の構築—大規模社会の脆弱性克服をめざして	羽生淳子	カリフォルニア大学バークリー校教授
住民主体の生態系サービスの管理・再生と持続可能な利活用のための、科学者とステークホルダーの協働から生まれる新たな地域環境知の探索	佐藤 哲	長野大学環境ツーリズム学部教授
巨大災害にどう対処するか—グローバル化時代のリスクガバナンス	窪田順平	総合地球環境学研究所准教授

HONG Sungheup

ホン・サンヘプ

●所属プロジェクト
東アジア内海の新石器化と現代化：景観の形成史

●招へい期間 2011年4月1日～2011年8月31日
●現職 国立全南大学人類学部教授
●専門分野 文化人類学・日本文化



YAHYA, Andi Saputra

ヤヒヤ・アンディ・サプトラ

●所属プロジェクト
メガシティが地球環境に及ぼすインパクト—そのメカニズム解明と未来可能性に向けた都市圏モデルの提案

●招へい期間 2011年4月1日～2011年6月30日
●現職 バタウィ文化研究所研究員
●専門分野 バタウィ文化



JORDAN, Peter David

ジョーダン・ピーター・ディビット

●所属プロジェクト
東アジア内海の新石器化と現代化：景観の形成史

●招へい期間 2011年5月9日～2011年8月11日
●現職 アバディーン大学考古学部准教授
●専門分野 考古学



招へい外国人研究者の紹介

PONGVONGSA Tiengkham

ポンヴォンサ・ティエンカム

●所属プロジェクト
熱帯アジアの環境変化と感染症

●招へい期間 2011年5月10日～2011年8月9日
●現職 ラオス保健省サワナケット県マリアアセンター所長
●専門分野 マリアア対策



AJITHPRASAD, Pottentavida

アジットプラサード・

ポットンタヴィダ

●所属プロジェクト
環境変化とインダス文明

●招へい期間 2011年5月10日～2011年8月9日
●現職 マハラジャ・サヤジラーオ大学考古学部教授
●専門分野 考古学



人事異動

2011年2月28日付け

【任期満了】

谷田貝亜紀代(研究部助教)

→神戸大学大学院海事科学研究科学術推進研究員へ

2011年3月31日付け

【退職】

井上 元(研究部教授)

定年退職

【辞職】

米澤 剛(研究推進戦略センター助教)

→大阪市立大学大学院創造都市研究科准教授へ

2011年4月1日付け

【配置換】

渡邊紹裕(研究推進戦略センター教授)

→研究部教授へ

【発令】

佐藤洋一郎(研究部教授)

→副所長(企画調整)、研究推進戦略センター長を併任

渡邊紹裕(研究部教授)

→副所長(研究)を併任

中野孝教(研究推進戦略センター教授)

→循環領域プログラム主幹を併任

川端善一郎(研究部教授)

→多様性領域プログラム主幹を併任

門司和彦(研究部教授)

→資源領域プログラム主幹を併任

谷口真人(研究部教授)

→文明環境史プログラム主幹を併任

湯本貴和(研究部教授)

→地球地域学プログラム主幹を併任

秋道智彌(研究推進戦略センター教授)

→ネットワーク拠点形成オーガナイザーを任命

イベントの報告

地球研 生存知イニシアティブ・
花博記念協会共催シンポジウム

報告 **もうひとつの生物多様性
—食と農の遺伝的多様性**
2011年3月15日(火) 13:00~16:30
(キャンパスプラザ京都 第1講義室)

東日本大震災の影響でスピーカーの一人、江頭宏昌氏(山形大学農学部)の不参加が直前に決まり、開催そのものも危ぶまれたが、主催者で相談の上、予定通り行なうこととした。本シンポジウムは直接的には生物多様性年の関連イベントとして企画されたものであるが、そのねらいは将来の日本の農業のあり方を考えることにあった。主として1次産業の担い手であった地域が被災地の復興を進めるに当たっては、当然わが国の食料生産のあり方が問われてくる。その道筋を確認する意味でも本企画の意義があると考え、開催することにした。

生物多様性を構成する一要素である遺伝的多様性は、用語としては一般にあまりなじみがないかもしれないが、食文化の豊かさや農業活動の安定に関与し、じつは私たちの暮らしと密接に関わる。本企画では、日本の農業・食文化における主要作物の遺伝的多様性の現状、その維持の方策を検証することをねらいとした。まず話題提供として、「(麦



とは何だろうか?」(河原太八・京都大学農学研究科)、「ソメイヨシノ誕生の(秘密)」(中村郁郎・千葉大学園芸学研究所)、「和牛のルーツと多様性」(万年英之・神戸大学農学研究科)、「京野菜における遺伝的多様性の減衰と維持」(山岸博・京都産業大学総合生命科学部)、「イネに見る遺伝的多様性」(佐藤洋一郎・地球研*江頭氏の代理)の五つのプレゼンテーションがあり、それらを踏まえて5名のスピーカーによるパネルディスカッションが行なわれた。たとえば京野菜の保全に典型的にみられるように、研究者の視点だけでなく生産現場で育てられてきた知恵の再検証の必要が確認されるとともに、育種における選抜と多様性の保全という、一見矛盾した方向性をいかにあるべきかたちで束ねるか、熱心な議論が行なわれた。(鞍田 崇)

地球研 風水土イニシアティブ
国際シンポジウム

報告 第20回ユネスコ国際水文学計画
(UNESCO-IHP) 研修事業記念
気候変化に備えるための鍵—地下水
2010年11月14日(日) 13:30~17:00
(メルパルク京都 6階ルームC)

本国際シンポジウムは、ユネスコ国際水文学計画の第20回研修事業を記念し、地球研の風水土イニシアティブ国際シンポジウムとして開催された。

気候変動に伴う水循環の変化が「地表水」の利用を難しくする可能性が指摘されるなか、地域の文化と深く繋がっている「地下水」が、水循環変化に対応する「鍵」として注目されている。最初の講演者、ユネスコ国際水文学計画のホルガー・トレイデル氏は「気候変動と人間活動の圧力下での地下水資源管理に関するプロジェクト」によって得られた科学的知見を、IPCC(気候変動に関する政府間パネル)等の報告書に反映させることで、さまざまなレベルにおける政策決定の手助けとする試みを紹介した。2人目の講演者の地球研・谷口真人教授は、地下水をどのように「所有」し「管理」するかの合意形成と、地下水の持続的利用の鍵となる地下水涵養量など、地域の「許容量」としての地下水評価の重要性を指摘し、気候

研究プロジェクト等主催の研究会(実施報告)

2011年1月15日~5月14日開催分

開催日	タイトル	主催(プロジェクトリーダー)	開催場所
1月18日	IS「ミクロネシア地域における社会変化—自然・社会環境と人々の生活」シンポジウム 「ミクロネシア地域における未来可能性—コミュニティのエンパワーメントに向けて」	野田伸一	地球研セミナー室
1月19日	風水土イニシアティブ基幹FS研究会・JST-CRESTプロジェクト合同研究会	渡邊紹裕	地球研セミナー室
1月21日	第23回 中国環境問題研究会 「雲南省DY県におけるアスベストの健康被害」 「洱海漁村の変化に対する自然環境の影響の評価—雲南省の漁村におけるケーススタディ」	中国環境問題研究拠点	地球研講演室
1月25日	第15回 資源・地球地域学プログラム定例会	資源領域プログラム 地球地域学領域プログラム	地球研セミナー室
1月26日	第7回 EPM勉強会 Establishment of a Research Consortium: Special Focus on Urban Water Consortium	EMP勉強会	地球研セミナー室
2月7-8日	東アジアにおける黄砂と砂漠化の長期変動に関する国際シンポジウム The International Symposium on the Long-term Monitoring of KOSA (Aeolian Dusts) and Desertification in East Asia	中国環境問題研究拠点	九州大学国際ホール
2月9-10日	奥宮プロジェクト国際ワークショップ Grassroot Level International Workshop in Dirang: Health and Development among Highlanders in Arunachal Pradesh, India	奥宮清人	インド、アルナーチャル・ プラデーシュ州 西カメン県ディラン
2月14日	モンゴル研究会「人間活動下の生態系ネットワークの崩壊と再生」	山村則男	地球研セミナー室
2月15日	第49回 地球研セミナー「モンゴル草原に及ぼす気候と遊牧の影響—典型草原と乾燥草原を例に」	縄田浩志	地球研講演室
2月21日	琉球大学熱帯生物圏研究センター・地球研合同セミナー「沖縄からアジアの環境問題を考える」	渡部久実	琉球大学研究者交流施設・ 50周年記念館
2月21日	第3回 文明環境史プログラムシンポジウム The Ecohistory of Yellow Belt and Green Belt in the Afro-Eurasia	長田俊樹	地球研講演室
2月22日	第16回 資源・地球地域学プログラム定例会	資源領域プログラム 地球地域学領域プログラム	地球研セミナー室
2月23日	第2回 モンゴル研究会「人間活動下の生態系ネットワークの崩壊と再生」	山村則男	地球研セミナー室
2月24-25日	第3回 フィードバックセミナー・バンコク	谷口真人	Chulalongkorn University, Bangkok
2月27日	IS「東アジア生業交錯地域における水と人間の歴史と環境」第2回研究会	村松弘一	地球研セミナー室
3月2日	風水土イニシアティブ基幹FS研究会「インドネシアを中心にして—現地の土地水管理の問題と研究課題」	渡邊紹裕	地球研セミナー室



変動と社会のグローバル化を視野に入れた、地域に即した制度設計の必要性を指摘した。3人目、アメリカ・ウイスコンシン大学のメアリー・アンダーソン教授は、米国アカデミー (NAE) が近

年まとめた40個の挑戦的テーマのうち、水文学にかかわるテーマを再整理し、それらはすべて、気候変動や全球スケールでのさまざまなストレスに水文システム (水循環) がどのように応答するのかを理解するために必要なものであることを指摘した。

発表に続くパネルディスカッションでは、コーディネーターの地球研・渡邊紹裕教授のもと、3名の講演者に加え、ウィルヘルム・ストラックマイア教授 (ドイツ地質調査所) と寛馨教授 (京都大学防災研究所) がパネリストとして加わり、「水資源研究の今後の方向性」、とくに地下水に焦点を当てて議論された。地下水研究の成果をわかりやすく伝えるためには、モニタリング、モデリングと政策決定は三つセットで行なう必要があること、近代化やグローバル化により地下水を利用しているコミュニティのつながりが薄れており、環境と調和して生きるといふことに対する再定義を行なう必要があることなどが議論された。(安元 純 琉球大学農学部)

地球研創立10周年記念シンポジウム

地球環境研究の統合と挑戦
 ——国際共同研究と未来設計イニシアティブ
 2011年4月20日 (水) 13:00~16:00
 (国立京都国際会館 RoomA)

地球研の創立10周年を記念したシンポジウムを開催しました。当日は、220名を超える皆さまにご聴講いただき、地球研10年の成果を統合して新しくスタートした、基幹研究ハブ・未来設計イニシアティブの活動についても紹介し、これからの地球環境研究のあり方を議論しました。

【講演およびパネルディスカッション】

- 安成哲三 (名古屋大学教授)
- 水見山幸夫 (北海道教育大学教授)
- 中静透 (東北大学教授)
- 佐藤洋一郎 (地球研副所長・教授)
- パネルディスカッションコーディネーター 谷口真人 (地球研教授)

シンポジウムのような本号の記念特集2「シンポジウムの検証」巻頭からの10周年記念特集 (6~7ページ) でも紹介していますのでご覧ください。

日文研・地球研合同シンポジウム

環境問題はなぜ大事か
 ——文化から見た環境と環境から見た文化
 2011年5月21日 (土) 13:30~16:30
 (国際日本文化研究センター 講堂)

恒例となった日文研との合同シンポジウムが今年も開催されました。今年のテーマは「環境問題はなぜ大事か」。それぞれに文化と環境を探究する二つの研究所の具体的な研究事例を350名を超える聴講者のみなさまに紹介し、文化と環境のとらえ方についての問題提起と相互討論を行ないました。

【発表および討論】

- 猪木武徳 (日文研所長) 「貿易と環境問題」 立本成文 (地球研所長)
- 「持続可能な発展を再考する: 復旧・復興・新興」 荒木 浩 (日文研教授)
- 「煙たい月は泣いているのか?」 阿部健一 (地球研教授)
- 「人のいる自然・人のいない自然」 討論進行: 佐藤洋一郎 (地球研副所長・教授)
- 総司会: 白幡洋三郎 (日文研教授)

前ページより

開催日	タイトル	主催 (プロジェクトリーダー)	開催場所
3月7日	第8回 EPM勉強会「アムール・オホーツクコンソーシアム設立以降の戦略」 The Strategy after Establishment of the Amur-Okhotsk Consortium	EPM勉強会	地球研セミナー室
3月12日	第8回 ジャカルタ都市研究会 Sanction through Divinity: The Chinese Community and Council (Gongguan) in Batavia, 1780s-1870s	村松 伸	京大大学人文科学研究所
3月14日	第3回 モンゴル研究会「人間活動下の生態系ネットワークの崩壊と再生」	山村則男	地球研セミナー室
3月15日	生存知イニシアティブ/花博協会共催シンポジウム「もうひとつの生物多様性——食と農の遺伝的多様性」	生存知イニシアティブ	地球研講演室
3月22日	第31回 環境疾患プロジェクト「食料需要と関連環境負荷の経済分析」	川端善一郎	地球研セミナー室
3月23日	第6回 全球都市全史研究講演会「人口・土地・文化資源からみる中国メガ都市の諸問題」	村松伸	地球研講演室
3月24日	第36回 エコヘルス研究会「日本における Kinanthropometry (動力学的人体測定学) の展望」	門司和彦	地球研セミナー室
3月24日	イリプロジェクト講演会「遊牧集団の移動と環境」	窪田順平	地球研講演室
3月25日	第24回 中国環境問題研究会「中国の草原利用をめぐる権利関係とその動向」	中国環境問題研究拠点	国立民族学博物館
3月28日	プロジェクト研究会「人間活動下の生態系ネットワークの崩壊と再生」	山村則男	地球研プロジェクト研究室
3月29日	第7回 全球都市全史研究講演会「コミュニティと都市」	村松伸	東京大学生産技術研究所
4月1日	第50回 地球研セミナー「The Library of Babel is burning (パベルの図書館炎上)」	地球研	地球研講演室
4月4日	第37回 エコヘルス研究会「サワラクにおける住民によるマラリア予報と効果的対策の実現」	門司和彦	地球研プロジェクト研究室
4月12日	第51回 地球研セミナー「招へい外国人研究員による自己紹介と研究計画」	地球研	地球研講演室
4月15日	プロジェクト研究会「黄砂現象の環境・健康影響——微生物および化学物質の長距離移動」	川端善一郎	地球研セミナー室
4月15日	CICORN・地球研ジョイントセミナー学部横断勉強会シリーズ「アジア・アフリカを架橋する」	門司和彦	長崎大学教育学部会議室
4月21日	第52回 地球研セミナー「共生——社会・疾病・そして地球環境」	地球研	地球研講演室
4月21日	プロジェクト研究会「地球温暖化に伴う北太平洋の気候変化の地域差とその不確実性: CMIP3マルチ気候モデルの実験結果を用いた解析」	檜山哲哉	地球研プロジェクト研究室
4月26日	第17回 資源・地球地域学プログラム定例会	資源領域プログラム 地球地域学プログラム	地球研講演室
5月6日	第25回 中国環境問題研究会「太湖流域の水環境保全をめぐるガバナンス」	中国環境問題研究拠点	地球研セミナー室
5月12日	第53回 地球研セミナー「招へい外国人研究員による自己紹介と研究計画」	地球研	地球研講演室
5月13日	プロジェクト研究会「人間活動下の生態系ネットワークの崩壊と再生」	山村則男	地球研プロジェクト研究室



イベント情報

第10回 地球研フォーラム

告知 「足もとの水を見つめなおす」

2011年7月3日(日)
13:30~17:00(12:30 開場)
(国立京都国際会館 RoomD) 入場無料
主催:地球研

地球は水の惑星といわれるように、私たちと水は切っても切れない関係にあります。人体の70パーセントは水であり、産業・飲料・衛生、さらに生物多様性の維持のために、水はなくてはならない資源です。しかし、水は単なる資源以上の存在でもあります。このたびの東日本大震災で多くの人の命が奪われましたが、水はときには自然の恐ろしさを代表するものといえましょう。人びとは、自然の恵みであり、同時に恐ろしいものでもある水とどのように向き合ってきたのでしょうか。本フォーラムでは、私たちの生活と深く関わってきた「足もとの水」を、文化のまなざしから見つめ直し、水にまつわる環境の問題を、ともに考えたいと思います。

【講演】

1. 「限られた水と多すぎる水」
窪田順平(地球研准教授)
2. 「水との関わりをとりもどす」
『うおの会』の活動を通じて
中島経夫(地球研客員教授、琵琶湖博物館名誉学芸員)
3. 「水は何をきれいにするのか?」
怪異譚にみる水と心
高岡弘幸(福岡大学教授)
4. 「水の記憶とその表現」
村松 伸(地球研教授)
5. 「インドネシアの水と民俗知」
MEUTIA, Ami Aminah(地球研研究員)

【パネルディスカッション】

司会:内山純蔵(地球研准教授)
阿部健一(地球研教授)

●申込み・問い合わせ先

地球研 研究協力課
地球研フォーラム事務局
TEL: 075-707-2492
FAX: 075-707-2510
e-mail: forum@chikyu.ac.jp



受賞 酒井章子准教授が「松下幸之助花の万博記念奨励賞」を受賞

2011年2月5日、地球研プロジェクト「人間活動下の生態系ネットワークの崩壊と再生」の酒井章子准教授が、財団法人松下幸之助記念財団より「松下幸之助花の万博記念奨励賞」を受賞しました。

同賞は、「国際花と緑の博覧会」の基本理念の実現に貢献した人、すなわちその目的にかなう学術的研究、およびその実践においてすぐれた成果をあげた個人、またはグループに与えられるものです。

酒井准教授の東南アジアの熱帯林における一斉開花現象や植物の繁殖生態についての研究業績、生物多様性についての執筆や啓発活動などが評価され、研究業績が受賞にふさわしいものとして選ばれました。

編集後記 創立10周年記念号発刊にあたって

今号は創立10周年記念号として、誌面を拡大してお届けします。新たな10年のスタートに先立って発生した東日本大震災は、われわれに大きな衝撃をもたらしました。価値観の転換さえも迫られるなかで、あらためて、「よりよく生きる」とはどういうことなのか、考えさせられました。また第II期に掲げた「設計科学」が、復興という現実の前で、何を提示できるのか大きな課題を突きつけられた気がします。

とはいえ、記念特集1「所長対談」は震災の直前にすでに実施していたことから震災に触れることはできませんでした。記念特集2「10周年記念シンポジウム」も、中心テーマを国際戦略にしばっていたことからこの話題は割愛せざるをえませんでした。それでも、震災をうけて、地球研の新たな取り組みをはじめ、すでに地球研のメンバーによる被災地での現地調査をスタートさせています。災害支援や復興プロセスを検討するセミナーも開催・計画しています。こうした地球研の取り組みは、次号以降のニューズレターでお伝えします。(編集室)

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構
総合地球環境学研究所報「地球研ニュース」
隔月刊
Humanity & Nature Newsletter No.31
ISSN 1880-8956

発行日 2011年6月1日
発行所 総合地球環境学研究所
〒603-8047
京都市北区上賀茂本山457番地の4
電話 075-707-2100(代表)
E-mail newsletter@chikyu.ac.jp
URL http://www.chikyu.ac.jp



編集 定期刊行物編集室
発行 研究推進戦略センター(CCPC)

制作協力 京都通信社
デザイン 納富 進

本誌の内容は、地球研のウェブサイトにも掲載しています。郵送を希望されない方はお申し出ください。